

祖堂集卷第十一

石頭下卷第七曹溪第七代法孫

保福和尚、雪峯に嗣ぐ。柔州に在り。師、諱は從展、姓は陳、福州福唐縣の人なり。年十五にして便ち雪峯に投じて出家す。十八、太州大中寺に於いて受戒す。既に師子の乳育、乃ち檀樹の抽芽。片月新に生れ、孤雲岫を出づ。海鵬羽を成し、霄漢を望みて以て身を騰げ、善友溟に臨み、摩尼を探りて掌に近づく。暫く吳楚に遊び、尋いで復た巾瓶す。弟子の礼纒かに施せば、接示の言便ち至る。雪峯云く、還た會するや。師、近前せんと欲擬す。雪峯杖を以て之を窟つ。師頓に玄要に契い、更に遊心無し。凡そ機縁有れば悉く皆な冥契す。

・既師子云々 雪峯の教育が師子が仔を育てるように秀れたものであった上に、師は双葉より香しい梅檀のよつに、將來大成する可能性を秘めた芽の出し方をした。

・片月新生云々 形をなした第一段階をいう。

・海鵬羽云々 海鵬は師を喩える。羽が生えそろつた段階でもう大空に向かつてはばたこうとするほどの力量を示した師に

対し、深い海の摩尼珠を探りあてて、師の手下に近づけてやる善き友があつた。善友は善知識、雪峯を指す。

・巾瓶 弟子として仕えること。祖堂集を編んだのは保福の弟子である。従つて生の資料を使ったに相違ない。この一段にも、保福の塔銘があつて、そこから引いて来たのであろうと思われる句が多く見られる。

後ち、柔州の王太傳、師の道德を仰ぎ、法輪を転ぜんことを請うを以て、師出世すること二十二年。

師、上堂して云く、人の問話するあらば、高聲に問え。時に人有つて出で来り、問う、学人高聲に問う、請う、和尚高聲に答えよ。師云く、什摩と道うや。学人再び前問を申ぶ。師云く、我は是れ聾を患うならず。

師は上堂して云う、問話するものがあれば、高聲に問いなさい。その時一人の修行僧が出て来て問う、わたくしは高聲に問います、どうか和尚さん高聲に答えて下さい。師が云う、何の話だ。修行僧は前問をくり返す。師が云う、わしはそんなつんばじゃないぞ。

・高聲に問えというのは、自分の責任において、儀礼的なものでない問いを問えという意であろう。学人の問いに対して、「何の話だ」と問い返したのは、(学人においては問い方だけが問題になっていて、内容がぬけおちている点をついたのである)玄の玄たるものは大きな声ではないという前提が師にあったのかも知れない。

人有り問う、摩騰漢に入り、一蔵分明なり。達摩西来して將^はた何をか指示するや。師云く、上座行脚底の事作摩生。僧云く、不會。師云く、會取すれば好し。傍家に人の処分を取ることを莫れ。

問う、攝摩騰が中国にやって来て、一大蔵経のことはすでに明らかになっております。なのに達摩は西来して、何を指示しようとしたのですか。師が云う、お前さんの修行者としての実践の方はどうなのだ。僧が云う、わかりません。師が云う、そこがちゃんとわからねばならん。赤の他人の達磨なんぞに指示を仰いだりなんかしなさんな。

- ・上座行脚底事作摩生 修行者としてお前はどうか生きているか。
- ・不會 質問の意味がわからなかったのか、行脚底の事がわからなかったのか、両様にとれる。
- ・會取好 一大蔵経のことよりも、まずお前の行脚底のことが大事だ。
- ・莫傍家取人処分 傍家の家の字には意味はない。

人有り問う、纒に三寸を施せば盡く蛩胡に渉る。如何にして徒に示せば前機に負くことを免るや。師云く、收拾し看よ。学云く、大衆咸な委せり。師云く、汝也た是れ天津橋上に眉を皺む。

・蛭胡 塗糊に同じ。のりがべったり。

・前機 言葉以前の機。

・收拾 不明。收拾の誤りか。

・天津橋 洛陽にあり、いろいろなエピソードの舞台となった。しかし、句の意味はよくわからない。

・よくわからない一段であるが、問意は、三寸の舌をかりてどのように示したならば、言葉以前の機にそむかないであらうか。言詮が宿命的にもっているところが犯すことなくしていかに言詮するか、というのである。收拾が收拾の誤りだとすれば、そこをお前が收拾してみよ、とがをおかすことなくうまくやってみろ、というのが師の答えである。そういう理念は誰でもこころえています。天津橋上に眉を皺むというのは、繁華な雑踏を目の前にしてオタオタしている様子か。

僧問う、祖祖相傳う、何の言有って属するや。師云く、汝は什摩辺より傳得し來たるや。進んで曰く、与摩ならば則ち学人退一歩せん。師云く、棄無端に進前退後して什摩をか作す。

僧が問う、祖祖相傳といいますが、どんな言葉を伝えたのでしょうか。師が云う、お前さんは誰れから伝えているのか。進んで云う、そういうことならわたしは一歩さがります。師が云う、お前さん、わけもなく進んだり退いたりしてどうしようもないのだ。・質問は何をつたえたかというのであるが、反問は何を「でなく」、「お前は」になっている。すなわち、師は学人と祖師とをストレートに結びつけたのである。お前は第何祖から伝えたか、お前は第何祖だ。そこで学人は恐れをなしてさがろうとしたのであろう。

時有って上堂す。云く、夜来、還た悟底有りや。个の消息を乞つ。不悟底ありや。个の消息を乞つ。悟底是か、不悟底是か。若し便ち悟り去るも亦た分外ならず。若し便ち悟り去らざるも亦た分外ならず。与摩に道われて便ち非悟非不悟と道うこと莫れ。錯るこ

と莫ければ好し。者の風漢与摩に道うは、人を屈著すること莫きや。問う、承わるらく、師に言有り、若し便ち悟り去るも亦た分外ならず。若し便ち悟り去らざるも分外ならず、と。未審し、如何なるか是れ不悟底の事。師云く、我をして阿誰に向かつて道わしむるや。云く、如何なるか是れ悟底の事。師云く、悟人即ち委せり。

ある時の上堂に云う、ゆうべ悟ったものがあるか。あればその消息を知らせてほしい。悟らなかつたものがあるか。あればその消息を知らせてほしい。悟ったのがよいか、悟らなかつたのがよいか。もしゆうべ悟ったとしても、けたはずれなことではない。もし悟らなかつたとしても、けたはずれなことではない。お前さんたちわしにそう云われて、悟りでもなく、悟らないでもない云うてはならない。錯つてはならんぞ。この氣狂いがそう云うのは、お前さんたちに濡衣を着せることになりはしないか。

問う、聞くところによりますと、和尚さんは、もしゆうべ悟ったとしても、けたはずれのことではない。もし悟らなかつたとしてもけたはずれなことではない、とおっしゃっておられます。何が悟らなかつた底の事でしょうか。師が云う、このわしに誰に向かつて云わせようというのか。云う、何が悟った底の事でしょうか。師が云う、悟ったものがころろえている。

・分外 悟る以前の自分を大きく超えていること。

・者風漢 悟りに対する常識的な考え方をひっくり返すようなことを云ったから、自分のことを氣狂いといったのであろう。
人有つて問う、学人、和尚が本来の事を見んと欲する時如何ん。師云く、退後せよ。進んで曰く、与摩ならば則ち非次なり。師曰く、汝亦た知りて故らに犯せり。

ある僧が問う、わたしが和尚さんの本来の事を見ようとしたらどうですか。師が云う、さがね。進んで云う、そういうことなら（私のやったことは尋常なことではないことになりませぬ。師が云う、お前も知っててことさらに犯したぞ、お前わかつているくせに非次をやらかしている。）

・与摩則非次也 次は世間一般の規範。非次は方外と似た概念、とつぴょうしもないこと。私は本来の事を問うべき分際ではない

ことになりますね。

・汝亦知而故犯 問うこと自体が非次だ。わかってたらよけいなことはせんほうがいい。

人有って問う、諸塵を弁ぜずして如何が端的ならん。師云く、さいわい虧に汝問えは即ち道わん。進んで曰く、与摩ならば即ち学人頼り有り去るなり。師云く、山鬼汝を屈するは自作の得なり。

・不弁諸塵云々 維摩經佛国品に「能善分別諸法相、於第一義而不動」とあるのを踏まえる。すなわち、諸塵を弁ぜずというのは「能善分別諸法相」である。端的というのが「於第一義而不動」である。諸の法相を分別しないで、どのように第一義において不動でありましょうか、という問である。

・虧汝問即道 ぐあいよくお前が問ってくれたから云ってやろう。虧が、くのおかげでの意味を持つようになるのは宋代以後のことである。しかしここにもよく当てはまるようである。

・与摩即学人有頼去也 そういうことならよろしくお聞かせねがいたい。

・山鬼屈汝自作得 山鬼がお前をだいなにしたのはお前のせいだ。師は、質問の出て来た意識自体が山鬼にしてやられているととったものか。

僧問う、一物も將^ち来らざる時如何ん。師云く、這裏に向かつて人の田地を汚すこと莫れ。云く、如何にして免れ得るや。師云く、如何にすれば即ち免れざるや。

僧が問う、無一物で来たらどうしますか。師が云う、ここでわしの田地を汚さないでくれ。僧が云う、どうしたら免れ得ましょうか。師が云う、どうしたら免れないか。

・如何免得 わしの田地を汚すなど答えた意味がこの僧にはわかっていない。だからこの問いが出たのであるう。

・如何即不免 免かれないのはどういつ在り方を考えて見よ。無一物という一物がこの僧にはちゃんとある。それを遮遣したのである。

僧有り、問う、十二時中如何んが據驗せん。師云く、恰も好し、據驗するに。云く、学人什摩と為てか見ざる。師云く、更めて捏目すべからざるなり。

僧が問う、十二時中、どのように点検したものでしょうか。師が云う、ちょうど点検するによいではないか。僧が云う、わたくしにはどうして見えないのでしょうか。師が云う、あらためて目をこする必要はないぞ。

・十二時中 原文は十二中時とあるが、伝灯録により十二時中と改める。

・據驗 一つ一つテストすること。問いは、十二時という生活時間の中で、正しきもの悪しきものをより分けて、排除すべきものは排除し、いいものはいいとして残して行く、一日の中の具体的な修行のあり方を問うたもの。

・学人為什摩不見 據驗すべきものが見えないのはなぜですか。

僧問う、至理は幽微なり、如何にしてか到るを得ん。師云く、別に更に夢見して什摩をか作す。進んで曰く、幽微の説すら猶お是れ夢言なり、何の示す所を以てすれば即ち夢言より出ずるを得るや。師云く、還た解くはよ恠笑し得るや。

僧が問う、至理は幽微です、どうしたら到ることができましようか。師が云う、ことあたらしく幻想してどうしようというのだ。進んで云う、幽微というあげつらいさなことをすると、どいつ風にお示しただければ、ねごとから抜け出せますか。師が云う、ねごとだとわらい捨てることができるか。

・夢見 幽微な至理などというものをことあたらしく措定すること。

・還解恠笑得摩 「解・得」は「能・得」と同じことである。三七一頁にも還解置得無という用例が見える。恠笑

はあざけること。用例については太田辰夫「祖堂集口語語彙索引」を参照。還解恠笑得摩が果たしてどうという意味合いをもつのかははっきりしない。

僧問う、十二分教は是れ背後の讚言。請う師、當讚にして便ち讚せよ。師云く、當不當。云く、還た全うするを得るや。師云く、続語すること莫ければ好し。

・全く解らない一段である。続語はねごと。

師は昔し江外に在りし時、先に雪峯に帰らんと欲す。遂に招慶に問うて云く、某甲先に山に帰らん。山中和尚も忽し上座に什摩の信有りしかと問はば、作摩生そまきんか祇対せん。招慶云く腥受を避けざることも亦た少し許り有り。師云く、信有りて什摩をか道う。招慶云く、某甲をして分付して阿誰にか与えしむるや。師云く、此の語有りと雖も未だ必ずしも与摩の事有らず。慶云く、若し与摩ならば則ち前程全て閻梨に在り。招慶云く、閻梨先に山に帰り、山中或は異聞底の事有らば、个の消息を乞う。師云う、設た使とい有るも、上座還た肯うや。招慶云く、是れ什摩の心行にして、人を推して泥裏に向かつて著かしむるや。

・この一段は原文自体に乱れがある。

・山中和尚 雪峯を指す。

・有信道什摩 便りにどういつているのか。

・教某甲分付与阿誰 私に一体誰にそれを伝えさせようというのか。直前の語とともに文脈の中に落ちつかない。

・雖有此語云々 そうおっしやるけれども、事実としてそういうことがあるわけではないでしょう。「此の語」というのは「腥受を避けざる云々」を受けるであらう。中間の二つの語を取り去れば、多少意味が通る。

・若与摩云々 あなたがそうお考えなら、これから先のこと、雪峯に対する伝え方などあなたにまかせます。前程は、具体

的な前途と、抽象的にこれから先の二つの意味を持つ。

- ・ 招慶云々々 以下、前の部分とどうつながるの不明。
- ・ 心行 不用意な痕跡を残すような心の働きを、第三者が批判的に云う場合に用いる語。どういふつもりで。

招慶、清源の請に赴くに臨みし時、遂に安國に命じて、師と同じく遊山せしむ。行する次で、招慶云く、某甲、山門に來り去りてより、已に二十八年を経たり。此の廻の住、心中也た足れり。師問つ、二十八年中に於いて、山中和尚、什摩の樞要の処有りしや。請う和尚家財(原作才)を費やさずして一兩則を拵せ。云く、一則有り、某甲收めて方便と為す。師云く、什摩の処ぞ。招慶首を挙げて顧視す。師云く、這个は則ち收めて方便と為す、只だ宗脉中の事の如きは作摩生。良久す。師云く、什摩人をしてか委せしめん。招慶云く、闍梨又た与摩に泥猪疥狗にして什摩をか作す。

- ・ 此廻住 清源に住職として招かれたこと。
- ・ 有一則某甲云々 山中和尚の樞要の処を方便としておさめている。
- ・ 什摩処 それはどこにか。
- ・ 泥猪疥狗 雲門録卷上「上堂云、我今日共汝設葛藤、屎灰尿火、泥猪疥狗、不識好惡、屎坑裏作活計。」敢えて自らを底辺に落として人のためにを圖ることの喩え。

招慶因みに拵す、僧、石霜に問う、如何なるか是れ一句。云く、非句無句は是れ句ならず。師、拵して問つ、古人与摩に道つは意作摩生。答えて曰く、實は即ち實なり。師云く、還た實を得たるや。答えて曰く、委曲に人に話似するは即ち得たり。師云く、非句無句は是れ句ならず。委曲に人に話似するは即ち得たり。本分に拠らば作摩生。答えて曰く、大衆惣べて委す、兄弟に此の間有るを。師云く、和尚、話を領するを謝す。

招慶が話柄を提示する、僧が石霜に問う、どういのが一句ですか。答えて云う、非句無句は句ではない。師がとりあげて問う、古人がどのように言ったのは、どんな意味ですか。(招慶が)答えて云う、本物であることは本物だ。師が云う、さあ本物でしょうか。答えて云う、こと細かに人に話すのはかまわない。師が云う、非句無句は是れ句ならずとして、こと細かに人に話すのはかまわないとしても本分の点からはどうでしょうか。答えて曰う、おまえさんにこの問いがあるということをおまはるは皆、わかっていません。師が云う、和尚さんがこの問答を受けとめてくださったことを感謝します。

・ 非句無句云々 この答えの意味は、非句無句という答えをしても、一句にはならないぞ、ということか。原文は非句、無句、不是句と並列に読むこともできる。

・ 話似 説似に同じ。

招慶因みに拳す、僧、徳山に問う、従上の宗乘、和尚の此間には如何が稟受して人に与うるや。徳山云く、我が宗に語句無し、實に二法の人に与うる無し。巖頭云く、實なることは即ち實なるも、唱教中に於いてなお嫡子を交す。師拈じて招慶に問う、巖頭は平生、什摩の言教有りて徳山に過ぐるや。招慶拳す、巖頭云く、もし人、射を学ばば久久にして方めて中たらん。時に人有り問う、中たる時如何ん。云く、痛痒を識らざる莫し。師云く、今日、唯だ拳話するのみに非ず。招慶云く、是れ什摩の心行ぞ。

・ 師拈問招慶 この問答は祖堂集卷七、巖頭の条、伝灯録卷十五にも見える。但し、伝灯録では保福が招慶に質問したことになっている。

・ 莫不識痛痒 この答えは矢が当たった場合には何らかの痛痒を感じるものだということ。

・ 今日非唯拳話 唯だ拳話してもらっただけでなく、解答まで教えて頂きましたという語気を含む。

招慶因みに拳す佛施婆梨尊者、西天より来たり、文殊に礼拝せんとし、文殊化人の問うに逢う、還た尊勝經を将ち得來たるか。云

く、將ち来たらず。文殊曰く、既に將ち来たらず、空しく来たるも何をか益せん。たとい文殊を見るも亦た何んぞ必ずしも之を識らん。(師)拈じて招慶に問う、經を將ち得来たれり。文殊は什摩処いずこに在りや。慶答えて云く、恰も是なり。慶却つて師に問う、經を將ち得来たれり。文殊は什摩処に在りや。師云く、互換の機は且らくまか從さん。只今作摩生。

・佛施婆梨尊者 尊勝陀羅尼經の訳者。話は經序にもとづく。

・恰是 いかにもいかにも、まさにそのとおり、ということ、保福が「將得經來、文殊在什摩処」と質問した、その質問の仕方を評したものであると考えられる。

・互換之機 互換は「賓主互換」の互換。上の二者の問答を示す。意味は「互換の機はまあおくとしても、私が聞きたいのは現在のことです」ということ。

招慶因みに拳す、古人道う、金屑銀屑貴しと雖も、肉眼裏には著おき得ず。豈に況んや法眼をや、と。招慶拈じて師に問う、只だ著き得ざるが如きは遠た著き得るや。師答えて云く、未在。更に道え。招慶遂に喝す。師却つて喝す。招慶却つて問う、闍梨は作摩生か道つ。師云く、某甲は齋の後未だ喫茶せず。

・古人道云々 自居易、西京興善寺傳法堂碑銘並序「然居易為、贊善大夫時嘗四詣師(大徹禪師)四問道、・第三問云、垢即不可念、淨無念、可乎。師曰、如人眼睛上一物不可住、金屑雖珍寶、在眼亦為病」。金屑は、菩提、涅槃、眞如、法性等を喩える。

・未在、更道 こう云つたのは、質問を全面的に否定したのではなくて、「もっと言つて更に高めよ」の意と考えられる。

・招慶却問 招慶がここで質問したのは、保福が喝したことを納得できなかったため。

師、拳す、教中に云く、寧ろ河は海に入らずと説くも、如来に二種の話ありと説かず。寧ろ羅漢に三毒ありと説くも、如来に二種

の語ありと説かず。如来に語無しと道わずして只だ如来に二種の語無しと道う。と。師拈じて招慶に問う、作摩生か是れ如来の語。招慶云く、聾人争か聞くを得ん。師云く、和尚、第二頭に向いて道うことは則ち得たり。招慶問う、闇梨は作摩生か道う。師云く、喫茶去。

・教中云云々 出典不明。この問答は碧巖録九十五則にも見える。

・和尚向第二頭道則得 招慶が「聾人争得聞」と答えたのは第一義的なものではないとしている。「第二義的にはそう言ってもかまわないでしょう」。

招慶拳す、南泉、月を翫めする次いで、時に僧有りて問う、何時か這今の月に似るを得ん。泉云く、王老僧も二十年前に亦た曾つて与摩にし来たれり。招慶続いて起問す、如今作摩生。師代りて云く、近日は老適にして且摩に時を過こす。招慶云く、闇梨の拳するに因らざれば、顔んど記を亡なせんことを成さんとす。師云く、宿習忘れ難し。筆山云く、今日、可殺はなはだ寒し。

招慶が拳似する、南泉が月見をした時にある僧が尋ねた、いつになったらこの月のようになれるんでしょうか。南泉が云う、私も二十年前にはまたこのようであった。招慶がこれに続けて問う、今はどうでしょうか。師が代わって云う、近ごろは、年老いてともかくにも時を過こしている。招慶が云う、おまえさんが示してくれなかったら忘れてしまつところであった。師が云う、身についた性は忘れにくいものです。筆山が云う、今日はきびしい寒さだ。

・王老僧 王は南泉の姓。

・老適且摩過時 伝灯録卷十四、葉山の伝にも「師與道吾説、茗谿上世為節察来。吾曰、和尚上世會為什麼。師曰、我痿々羸々、且恁麼過時」の問答が見える。

・顔成亡記 自分も年とつたことを忘れてしまつところであった。

・宿習 身についた性。和尚さんは近日どころではなくて以前からそうであったと招慶を冷やかしているのかもしれない。

・篁山 原文「困山」を「篁山」と改める。鼓山・長慶とともに雪峯門下の人。鼓山先興聖国師和尚法堂玄要廣集に見られる。

・今日可殺寒 近日老邁に代わる語。

因みに挙す、東寺問う、近ごろ什摩の処を離るるや。云く、近ごろ江西を離る。東寺云く、馬師の真を將ち得來たるや。對えて云く、只だ這个是れなり。云く、背後底。師代わりて云く、顔んど此間に到らざらんとす。招慶云く、太だ知らざるに似たり。

挙似する、東寺が問う、近ごろどこからやって來たのか。(南泉が)答えて云う、近ごろ江西からやって來ました。東寺が云う、馬祖の影像を持つて來たか。答えて云う、ほれこのとおりです。東寺が云う、背後のはどうだ。師が代わって云う、あやつく來れなところだった。招慶が云う、(和尚さんは馬祖を)全然こ存じてないようだ。

・因拳 祖堂集卷十五東寺の条、伝灯録卷七參照。東寺と南泉の問答。

・似太不知 保福が「顔不到此間」と言ったのに対する招慶の批評。

因に挙す、長慶云く、我に一個の問有り。天下人の口を唾却せん。又云く、汝且らく作摩生か問わん。師代わりて云く、和尚の重の相い為にするを謝す。

・唾却 原文「炯却」とするも「唾却」と改む。

因に挙す、無著和尚、五臺山に到つて文殊の化寺を見て共に喫茶する次で、文殊は茶位子を提起して云く、南方に還た這个有りや。無著云く、無し。文殊云く、尋常、什摩を將つてか喫茶す。無著對無し。師代わって云く、幾んど与摩に道わざらんとす。又代わつて云く、久しく金毛を嚮つに今日親しく見えたり。招慶代わつて云く、若し与摩なれば、則ち癡客の主人に勸む、請う、茶を盡せ、と。

ちなみに挙す、無著和尚が五台山に行き、文殊の化寺を見て、一緒に茶を飲んだ時、文殊は茶碗を持ち出して云う、南方には一体これがあるか。無著は云う、ありません。文殊は云う、平生、何で茶を飲んでいるのか。無著は答えない。師が代わって云う、(うっかり茶碗と云うところだったが)かろうじてそう云わずに済んだ。又代わって云う、長いあいだ、金毛を慕っていたが、今日やっと目のあたりに見た。招慶が代わって云う、もしそついうことなら、愚かな客が主人に勧める、もっとおあけ下さい、と。

因みに挙す、先の洞山、興平を辞す。興平問う、什摩の処にか去く。洞山云く、流れに沿って止まる所無し。興平云く、法身の流れに沿うか、報身の流れに沿うか。洞山云く、惣に是の如きの見解を作さず。師代わって云く、幾個をか見め得たる。

ちなみに挙す、前の洞山が興平を辞去する。興平が問う、どこに行くのか。洞山が云う、流れのままに止まるところがありません。興平が云う、法身が流れのままなのか、報身が流れのままなのか。洞山が云う、全くそのような立場をとりはしません。師が代わって云う、いくつ見つかるとは。

因みに挙す、耆婆、弟子に云く、汝は山中に於いて、薬と為すに中らざる草を求めて帰り来たれ。弟子、帰り来たりて云く、並に薬と為すに中らざる草有ること無し。師は遂に提起して問う、このは還た薬と為すに中るや。对えて云く、什摩の病が有りて、敢えて出頭する。師肯わず。自ら代わって云く、什摩の氷消せざるもの有らん。

ちなみに挙す、耆婆が弟子に云う、君は山の中で薬としては使えない草をさがして帰って来なさい。弟子は帰って来て云う、どこにも薬として使えないような草はありません。師はそこで提起して問う、これはさて薬として使えるか。答えて云う、どんな病気をかかえて(ここへ)出て来られたのです。師はうけがわぬ。自分で代わって云う、どんな氷消しないものがあるうか。

因みに挙す、塩官、座主に問う、花嚴経に幾種の法界か有る。对えて云く、四種の法界あり。(塩官)拂子を提起して(云く)、このは

阿那个の法界中にか収むる。無对。師代わって云く、若し只だ礼謝せば、則ち和尚の棒を喫原文になし著せん。

ちなみに挙す、塩官が座主に問う、華嚴経には何種類の法界があるか。答えて云う、四種の法界です。塩官は拂子を提起して云う、これはどの法界の中におさまるか。答えなし。師が代わって云う、おじぎばかりしていたのでは和尚の棒をくらうことになつてしまつぞ。

因みに挙す、南泉云く、文殊と普賢は昨夜三更、人毎に各おの二十棒を与えて一時に院を趁い出だせり。趙州云く、和尚の棒は什摩人にか喫せしむる。師代わりて云く、道わざるを得ず。

ちなみに挙す、南泉が云う、きのこの真夜中、(我見を起こした)文殊と普賢はめいめいに二十棒くらわせて院を追い出した。趙州は云う、和尚の棒はだれにくらわせるのですか。師が代わって云う、言わずにおれないのですね。

・文殊普賢云々 この問答は、禅門拈頌集、伝灯録、碧巖録等に見えるが、師(南泉)を主語とするか、文殊普賢を主語とするかの二説があり、それぞれ問題を含んでいる。

因みに挙す、先の洞山、雪峯に問う、入門は須らく語を得べし。早^すに入門し了れりと道^すうを得ず。雪峯云く、某甲は口無し。師云く、口無きは則ち且らく従^ます。我に眼を還し来れ。对無し。師代わりて云く、若し眼を問わば、某甲は謹んで状に随つて退かん。

・還我眼来 眼は汝の主人公と解され、還は未生以前の面目を還せの還。

・某甲 原文は和尚とするも落ちつかず、伝灯録に従つて改む。

・状 法律用語。告訴状、逮捕状、判決文など。

因みに挙す、僧、先の洞山に問う、従上、幾人か此の門に入ることを得たる。洞山云く、実に一人の此の門に入ることを得たるも

の無し。進んで曰く、与摩に道うは人を屈すること莫きや。洞山云く、若し実に此の如くなるも亦た人を屈着せず。時に学人有りて問う、古人は還た入門を扶くるか、入門を扶けざるか。保福云く、行脚して什摩人の力をか得たる。

ちなみに拳す、僧が前の洞山に問う、以前から、何人が此の門に入りましたか。洞山は云う、全く一人もこの門に入り得たものはいない。進んで曰う、そう言つては、人にぬれぎぬを着せることになりはしませんか。洞山は云う、もし本当にこのようであつても人にぬれぎぬを着せたことにはならぬ。時に学人があつて問う、古人は一体、入門をたすけたのですか、入門をたすけなかつたのですか。保福が云う、行脚して、どんな人のおかげを蒙つたのか。

・扶 足の悪い老人など歩行をささえて介添えする意。

・行脚 自分の足で歩くこと。保福の語は、「君は行脚するのにだれかの介添えがあつたのか」という意。

僧拳す、盤山云く、光境俱に亡ぶ復た是れ何物ぞ。洞山云く、光境未だ亡せず、復た是れ何物ぞ。二彼の商量は扱るに盡く未だ勤絶することを得ず。師拈じて其の僧に問う、作摩生か道い得て勤絶せん。僧云く、還た解く恠永し得るや。師云く、常の恠永し得るには非ず。学人却つて和尚に問う、如何んが道いて勤絶することを得去らん。師云く、両手犁を笑け、水の膝を過ぐ。自後、招慶に拳似す。保福道う、常の恠永し得るに非ずとは意作摩生。招慶云く、法を盡さば民無し。

僧が拳す、盤山は云う、光境がともに亡ぶときそれは何か。洞山が云う、光境がまだ亡びないときそれは何か。二人の商量は全て徹底的ではない。師はとりあげてその僧に問う、どう言えたら徹底するか。僧が云う、一体笑いとばすことができますか。師は云う、尋常に笑いとばせることではない。学人がそこで和尚に問う、どう言えは徹底することができますか。師は云う、両手は犁をささえ、水は膝の上まである。そのち招慶に拳似した。保福は道う、尋常に笑いとばせることではない、のねらいは何ですか。招慶が云う、法律を徹底的に適用すると民がいなくなる。

・光境云々 伝灯録三十證道歌「心法雙亡性即真」の心法に配されよう。

・恠笑得摩 私が先程「二彼の商量・・」と云つたことを笑いとばすことができますかという問い。

・両手犁云々 満々と水をたたえた水田に一人の農夫が犁をささえて立っている好風景か、それとも勤絶できない境を意味するものか。安易な遮遣ではすまずことのできぬものがそこにある。

・盡法 盡法の盡は断滅の意と徹底させるの二意があるが、ここでも二意ともに通じる。

因みに挙す、曹山三種闡提に云く、殺して一切を盡くすを名づけて闡提と曰う。一闡提を殺さば福を得ること無量ならん、と。僧問う、只だ一闡提の如きは作摩生か殺さん。師云く、殺さず。進んで云く、什摩と為てか殺さざる。師云く、若し殺さば則ち闡提に同じからん。

・卷八曹山の伝にある次の問答を踏むものである。「問、教中有言、殺一闡提、獲福無量、如何是闡提。師云、起佛見法見者。云、如何是殺。云、不起佛見法見是殺。云々」。

因みに挙す。雲居徒に示して云く、一百個の話を挙げ得るは一個の話を揀び得るに如かず。一百個の話を道取するに如かず。一百個の話を道い得るは一個の話を道取するに如かず、と。時に僧有り問う、只だ一個の如きは作摩生か行ぜん。師云く、行ぜず。進んで云く、什摩と為てか行ぜざる。師云く、汝須らく礼拝すべし。

・揀得は、これだとえらびとること。道取は、自分の肉声で一つ云うこと。卷十九大慈和尚の伝を参照。

因みに挙す、曹山云く、佛既に一言を説き、五百害心生ず。如何なるか是れ此の言。師云く、冷侵侵地。進んで曰く、既に此の言

有り、什摩と為てか却つて返怨するや。師云く、汝は什摩をか喚んで返怨と作す。对えて云く、唯だ父面を見るを喜ばず。時に学人有つて問う、父に什摩の過有りや。師云く、父に過無し。云く、既に過無し、什摩と為てか見るを喜ばざる。師云く、只だ過無きが為に、所以に見るを喜ばず。

ちなみに挙す、曹山云う、佛が一言説いたため、五百比丘に害心が生じた、と。此の一言とはいかなるものでしょうか。師が云う、ソクソク。進んで曰う、此の一言があつたのに、何故さかうらみしたのでしょうか。師が云う、お前さん何をさかうらみというのだ。こたえて云う、親の顔が見たくないだけです。その時一人の修行僧があつて問うた、親にどんなとががあるのですか。師が云う、親にはとがはない。修行僧が云う、とがもないのに何故顔を見たくないのですか。師が云う、とががないからこそ見たくないのだ。

・ 佛既説一言云々 話の内容は大寶積經卷百五にもとづくと思われるが、曹山の話として何処にあるか不明。

・ 冷侵侵地 ぞくつと総毛立つような寒さ、あるいは恐れを表す。ぞくぞくしたのは比丘か、それともその場の情景がぞくつとするものであつたのか。

・ 只不喜見父面 丹霞天然に、「佛之一字永不喜聞」の語あり、趙州從誕に、「佛之一字吾不喜聞」の言あるを参照。

因みに挙す、南泉、座主に問う、什摩経を講ずるや。座主云く、上生経を講ず。南泉云く、弥勒は什摩の処に在りや。对えて云く、兜率陀天に在り。南泉叱して云く、天上に弥勒無し。後ち僧は洞山に拳似す。洞山叱す、地下に弥勒無し。人有つて師に問う、弥勒は什摩の処に在りや。師乃ち之を叱す。

ちなみに挙す、南泉が座主に問うた、どんなお経を講じているか。座主が云う、弥勒上生経を講じております。南泉が云う、弥勒はどこにいるか。こたえて云う、兜率陀天にあります。南泉はしかりとばして云うた、天上には弥勒はおらぬぞ。のち、ある僧が洞山にこの話をした。洞山はどなった、地上に弥勒はおらぬぞ。ある者が師に問うた、弥勒はどこにありますか。師は叱りと

ばした。

・洞山録および伝灯録雲居道膺の伝参照。

因みに挙す、教中に言つ有り、應真の菩薩は内外俱に黄金色を作す、と。時に人有つて問う、直に与摩なるを得る時、是れ什摩人分上の事ぞ。師云く、是れ兄が分上の事ならず。云く、与摩ならば則ち強有り弱有り去るなり。師云く、前話已に墮せり。

ちなみに挙す、教中に云つている、應真の菩提は内外ともに黄金色である、と。その時ある者が問つた、そうなるということは何人分上の事ですか。師が云う、あなたの分上の事ではない。云う、そういうことなら、優劣があるということになりますね。師が云う、前の言葉に矛盾がある。

・應真菩薩 釈尊の前身羅漢僧、凡夫僧などという云い方と同類の云い方であるが、今出典を明らかにし得ない。

・有強有弱去 人々の本分には優劣も高低もないはずだが、という問意。

・前話已墮 問い方にすでに矛盾がある。墮は、墮負処の意。論理的な破綻におちいること。詳しくは如実論参照。

師因みに挙す、初祖、少林寺裏に於いて面壁打坐すること九年。寺裏三千人の聴徒、口懸河に似たり。只だ云う、此は是れ西天の小乘壁觀婆羅門、什摩の靈処有りや。直是理有るも^{たとい}靈処なし、と。時に人有つて問う、既に理有るも什摩と為てか靈処なき。師云く、只だ此の如きが為に、所以に此の如し。若し此の如くならざれば、焉んぞ此の如きを知らん。僧云く、此の如くならざる事作摩生。師云く、我が打睡するを放す莫れ。

師がちなみに挙す、初祖は少林寺において面壁打坐されること九年であった。寺には雄弁を誇る学徒が三千人いたが、これは印度の小乘壁觀婆羅門である、なんのふしぎさがあるというのか。たといちゃんとしてはいてもふしぎさはない、と云つた。一人の僧が問う、ちゃんとしているのにどうしてふしぎさがないのですか。師が云う、このようだからこのようなのだ、このようでなかつ

たらこのようだと思われるわけがないではないか。僧が云う、このよつでない事はどうですか。師が云う、わしに居ねむりをさせてくれるな。

・ 靈処 靈驗あらたかなところ。鳥が花をささげたとか、後光がさしたとかいふこと。

・ 有理 如法と置き換えてもよい。理に重い意味はない。俗語

・ 莫放我打睡「放」は「妨」の誤りではなからうか。だとすれば、「わしの居ねむりをじゃましないでくれ」、すなわちべちゃくちやとしたおしゃべりはやめてくれということになって、この方が面白い。

師、時有つて云く、諸法に座せずして還た過なきを得るや。

・ 座は因あるいは縁と置き換えうる。諸法とかかわりを絶つてしまふ、諸法という場からはずれてしまふということとで、あやまちなきを得るか。趙州録に、問、不與萬法為侶者是什麼人。師云、非人」とある。

時有つて云く、諸聖に見えんと欲得せば、亦た此の門より入れ。諸聖に見えんと欲得せざれば、亦た此の門より入れ。師却つて僧に問う、作摩生か是れ汝が入門底の事。僧云く、當不覺。師云く、是れ凡か是れ聖か。対えて曰く、未だ問わざる己前より、却つて和尚を疑えり。師、之を叱す。

師はある時云う、諸聖にお目にかかるうと思つたら此の門から入れ。諸聖にお目にかかるうと思わなかつたら、此の門から入れ。そのあと師の方から僧に問うた、お前さんの入門底の事はどんなものだ。僧が云う、當不覺。師が云う、お前さんは凡か聖か。こたえて云う、実は和尚さんが問われる以前から、くさいと思つておりました。師は僧をどなりつけた。

・ 不欲得見諸聖云々 伝灯録卷五青原行思の伝に、石頭希遷と南嶽懷讓との次の問答が記されている。「問、不慕諸聖、不重己靈時如何。讓曰、子問太高生。何不向下問。遷曰、寧可永劫受沈淪、不從諸聖求解脫。讓便休」。今いう「欲得見諸聖」

は「慕諸聖」に、「不欲得見諸聖」は「重己靈」にあたるであろう。石頭は両方とも遮遣しているのであるが。

- ・ 當不當 これであつてこれでない。肯定と否定とを一緒くたにしたもの。
- ・ 未問己前云々 凡か聖かを問うだろうと思つておりました。

問う、古人言つ有り、無生の路に達せんと欲せば、應に須らく本源を識るべし、と。如何なるか是れ本源。師良久す。却つて侍者に問う、適来、僧は什摩を問いしや。其の僧再び拳す。師便ち出でよと喝して云く、我は是れ聾を患うならず。

問う、古人がいつております、無生の路に達したいなら、本源を見てとらねばならない。何が本源でしょうか。師は黙している。そして、方向をかえて侍者に問う、いま僧はなにをたずねたか。その僧が再び質問する。すると師は出てゆけどどなつて云つ、わしはそんなつんぽではない。

- ・ 古人 不明。無生は仏法の代名詞と見てよい。
- ・ 侍者に問うた意味は、良久してみせたが相手の僧に何の反応もないため、方便をもうけたことにあるであろう。

師、漏を患つ次いで、僧問う、善知識は諸漏已に盡く、什摩としてか漏を患つ。師云く、若し是れ善知識ならば、一物も亦た違せず。僧云く、苦楚をいかんせん。師云く、若し衆生の苦しむを見れば、則ち苦を受くる者に同ず。

師が漏を病んだとき、僧が問うた、善知識は諸漏がすでに盡きているはずなのに、どうして漏を病んでおられるのですか。師が云つ、善知識というものは何ものにもさからわないのだ(腹から出るものは出す)。僧が云つ、その苦しさはどつしよつもないのではないですか。師が云う、衆生の苦しんでいるのを見れば、一緒に苦しむのだ。

- ・ 患漏 下痢のことか。弟子は漏を煩惱の意味にひっかけて問つたもの。
- ・ 争奈苦楚何 その苦しさをどつ始末されますか。

・若見衆生苦云々 維摩經問疾品に「衆生病則菩薩病、衆生病愈菩薩亦愈」とある。

因みに小師行脚して帰る。師問う、汝乱走して還た變ぜしや。對えて云く、是れ神ならず、是れ鬼ならず、什摩にか變せん。師云く、又た乱走して什摩をか作す。對えて云く、也た和尚の鑿せんことを要す。師云く、汝に二十棒を放す。師代わつて云く、和尚什摩の処にか走到すと見るや。

小師が行脚から帰ったとき、師が問う、お前さんやたら走りまわつて別なものに変わったか。こたえて云う、私は鬼神ではありません、なにに変わりましたよ。師が云う、それにしてもやたら走りまわつてなにをしようというのだ。こたえて云う、和尚さんに判定してほしいのです。師が云う、お前さんに二十棒かんべんしてやる。師は代わつて云う、私はやたら走りまわつてどこへ行きつくと、和尚さんご覧になりますか。

・汝乱走還變 行脚によつて別なお前に生まれ変わったか。

・什摩變 人間なんだから別なものに変わるような手品はできない。私はごらの通りの私です。

・又乱走作什摩 ごらの通りのお前であるなら、何故一体乱走するのか。変わりようのないお前が乱走してどうしようというのか。

師、僧に問う、我れ尋常道う、道うこと莫れ、道不得と。設たとい而道得して十成なるも猶是れ書たといを患う、と。既に道得して十成なるに、什摩としてか却つて書たといを患うことを成すや。僧云く、從來豈に是れ道得底の事なりや、那作摩。師、声を抗げて云く、脱却し来れ。其の僧別して云く、頭上に更に頭を安ず可からず。師云く、囚を停めて智を長ぜしむ。

師が僧に問う、わしはいつも、云えないと云つてはならない。しかしたとい百パーセント云えてもどりの云い方にとどまると云つてゐる。百パーセント云いたのにどうしてどりの云い方にとどまるか。僧がこたえていう、從來のお言葉が云いたも

のではないですか、どうですか。師は声をあらげて云う、脱却して来い。その僧は別の答えをもちだす、頭の上にも一つ頭をおくことはできません。師がいう、囚人を長いことほっておいて、わる智慧をつけさせたわい。

・從來豈是云々 從來というのは、師が尋常云っている「莫道道不得、設而道得十成、猶是患害」という語を指す。これは矛盾を含んだ提言であるが、それがまさに道得底ではないかといって、そのような命題を定立することの矛盾をつこうとする。那作摩は、句末の作摩にほぼ同じ。詰問の語気を添える。

・頭上不可更安頭 そのような命題を出すことは私にとってはナンセンスだ。

・停囚長智 答えを賞めたものである。

僧辞す。師問う、什摩の処にか去く。対えて云く、什摩の処か是れ某甲の去く処ならざる。師云く、忽然として山河大地、又た作摩生。対えて云く、什摩をか喚んで山河大地と作す。師云く、汝は話墮せり。

僧が辞去しようとした。師が問う、どこに行くのか。答えて云う、どこが私の行かないところでしょうか。師が云う、たちまちのうちに山河大地、さあどうだ。答えて云う、何をさして山河大地と言つのですか。師が云う、おまえさんの話は破綻をきたしたな。

・什摩処云々 質問の意味は、私の行く処に「どこ」という限定は無用です、歩くところに差別はありません、ということ。
 ・忽然山河大地これでは意味をなさない。「忽然」の下に一字を加えるか、然を別字に直す必要があり、それには二つの方向が考えられる。一つは崩とか没を加えて私の行かない処はありません、私の歩く処に限定は無用です、自在に歩けますと気負って答えたのに対して、それではその歩くことについて、歩こうとする山河大地、即ち歩く基盤自体が無くなってしまつたらどうするのか、ともう一步進んで試したと考えられる。もう一つは生、現などを加える。山河大地のないところにあぐらをかいている僧に対して、山河大地をつきつけてみせた。「長水問瑯溪覺和尚、如何是清浄本然、云何忽生山河

大地。覺勵聲云、清淨本然、云何忽生山河大地。長水言下領悟（会元十四長水章）。「世尊若復世間一切根塵陰処界等皆如来藏、清淨本然、云何忽生山河大地諸有為相、次第遷流修而復始」（楞嚴經四）

・汝話墮也忽然山河大地という問いをまともにつけとめるべきであったのに、それを無視してしまったことを指す。僧は観念的な平等一枚に坐り込んでしまっている。

問う、不問不答の時如何ん。師云く、道わず。進んで曰く、什摩としてか道わざる。師云く、棄もまた虚しくこの問有り。

問う、不問不答の場合はどうでしょうか。師が云う、云わない。一歩進んで云う、どうしておっしゃらないのですか。師が云う、おまえさんもいたずらにこんな質問をしているではないか。

・師云棄也虚有這個問 わしも云わないし、おまえさんもまた質問をしたことになってはいない、無内容な質問だ。これは質問者の立場にまで降りて「虚」と注をつけた答え方である。「不道」「不問不答」と答えてもよいところである。

師、上堂して云く、此の事は今の什摩にか似たる。閃電に相い似たり、石火に相い似たり、火焰に相い似たり、霹靂に相い似たり。是れ棄諸人着力し、須く趁著し得て始めて得べし。若し趁著せざれば喪身失命す。人有り、便ち問う、師の言有るを承る、是れ棄諸人、着力し須く趁著し得て始めて得べし。若し趁著原作者（せざれば喪身失命すと。直得^{たと}い趁著するも、還た喪身失命せざらんや。師云く、失不失は即ち且らく置く。是れ棄、還た趁著するや。対えて曰う、若し趁不著と道わば人の恠笑を招かん。師曰く、是れ棄、趁著する底の事作摩生。対えて曰く、和尚、還た解く恠笑し得るや。師曰く、汝は是れ悪人なり。僧曰く、何んぞ必せん。師便ち打ち、出で去らしむ。

師が上堂して云う、此の事は何に似ているだろうか。稲妻に似ている、石火に似ている、火焰に似ている、霹靂に似ている。お

まえさん方は努力して是非とも追いつかねばならん。もし追いつけなかつたら喪身失命するのだ。ある人がそこで問う、師の言を伺いますに、おまえさん方は努力して是非とも追いつかねばならん、もし追いつけなかつたら喪身失命するのだ、ということですが、たとい追いついたとしても、喪身失命するのではないのでしょうか。師が云う、失う失わないはまあ置いておくとして、おまえさんは追いつけるのか。答えて云う、もし追いつけないと言ったら、人に笑われるでしょう。師が云う、おまえさんが追いつけるということの内実はどうだ。答えて云う、和尚さんはそこで笑いとばすことができますか。師が云う、おまえさんは人が悪い。僧が云う、それでもありません。師は打って出ていかせる。

師拳す、曹山、無著に代りて曰く、久しく大師按劔すと承ると。何んぞ一塵に処在するを得んや。僧便ち問う、作摩か是れ文殊の劔。对えて曰く、道わず。什摩としてか道わざる。曰く、道えば則ち一塵に在り。

師が拳似する、曹山が無著に代わつて言っている、大師は刀のつかに手をかけて人を切るうとしてしていると、前々から聞き及んでおります、と。どうして一塵のところにとどまることが許されるのか。僧がそこで問う、どういのが文殊の劔ですか。答えて云う、言わない。(問う)どうしておっしゃらないのですか。答えて云う、言ったら一塵のところにいることになる。

・曹山代無著云々 出典不明。曹山が代わつて言った、もとの無著の話の出典も不明である。無著が五台山で文殊に会った話から出ているのかもしれない。又、文殊が剣を抜いて釈迦に迫ったという話は大宝積経に見える。

・大師 文殊とするならば大士に直さなければならぬ。

・作摩是文殊劔 この作摩は珍しい言い方。

・道則在一塵 按劔して法執を払おうとすることが処在一塵である。

鼓山、静道者に問う、古人道えらく、這裏は則ち易く、那裏は則ち難し、と。這裏は則ち且らく従さん。那裏の事作摩生。道者曰

く、還た這裏那裏有りや。鼓山、之を打つ。師云く、打つことに道理有りや、打つことに道理無きや。学人云く、静道者の分上に於いて商量せば則ち得たり。師云く、古人の意作摩生。学云く、某甲は古人に辜負すと道うべからず。師云く、古人に辜負せざるの事作摩生。対えて云く、和尚は此の便に慣得ず。師云く、棄もまた是れ此の便に慣得ず。

鼓山が静道者に問う、古人が、こつちは易しいがあつちはむずかしいと言っている。こつちのことはまあ置いておくとして、あつちの事はどうだ。道者が答えて云う、さあ、こつち、あつちがありましようか。鼓山は道者を打った。師が云う、打ったことに道理があるのか無いのか。学人が答えて云う、静道者の分上で議論すればそれでよいでしょう。師が云う、古人の意はどうだ。学人が云う、私が古人に負いているとは云えません。師が云う、古人に負かないということはどうだ。学人が云う、和尚さんはその手に慣れていらつしやる。師が云う、おまえさんもまたこの手に慣れてる。

・ 於静道者分上云々 静道者の分上が打に当たる場合には道理があることになるし、打に当たらない場合は道理がないことになるでしょうといつづるい答え方である。

・ 古人意作摩生「還有這裏那裏摩」という静道者の分上はともかくとして、一応這裏、那裏と分けた古人の意はどうか、という質問。

・ 不可道某甲云々 私は古人の意に反対ではありません、とただ言うだけでなく、もう一步先を言っている。

・ 不辜負古人事作摩生 先の二つが要領のよい答えであるため、おまえさんの分上で言ってみなさいとつきつめている。

因みに挙す、彦上座 九峯和尚に問う、又須く栢樹子を道取すべし。觸着するを得ざれ。和尚、如何んが道わんと。和尚対無し。彦上座、長慶に挙似す。長慶却つて上座に問う、此の問に当たつては、上座、和尚に代わりて作摩生か道わん。上座対えて云く、四時を逐いて彫れず。長慶、保福に挙似す。保福拈じて長慶に問う、只だ上座の四時を逐いて彫れずと道うが如きは、与摩に道うは還た勤絶を得たるか、為當勤絶を得ざるか。慶云く、争でか勤絶を得ん。師云く、大衆、分明に記取せよ。向後作家に挙似するに第一機

もて对せよ。篁山云く、是れ恍榔樹ならず。師云く、恍榔樹は是れならず。

ちなみに拳似する、彦上座が九峯和尚に問う、ひとつ栢樹子を過不足なく言つてのけなさい。ただし、栢樹子を傷つけてはならない。和尚さんはどのように言いますか。九峯和尚は答えない。彦上座は長慶に拳似する。長慶は上座に問いかえす、こんな質問をされた場合、上座は和尚さんにかわつてどう云いますか。上座は答えて云つ、季節を追つて枯れない。長慶は保福に拳似する。保福が長慶に問う、上座が季節を追つて枯れない、とこのように云つたのは、徹底できたのか、それとも徹底できていないのか。長慶が答えて云う、どうして徹底できていようか。師が云う、おまえさん方は、はっきりと心に刻んで、今後、作家に拳似する場合には、第一機で対応しなさい。篁山が云う、恍榔樹ではない。師が云う、恍榔樹はそうでない。

・又須道取栢樹子 この問いの以前に何か問答があつたようである。

・不得觸着 觸は觸犯の觸。

・不逐四時彫 善慧大士語録卷三頌二首の二、「有物先天地、無形本寂寥。能為萬象主、不逐四時凋」。

・争得勦絶 長慶は何故栢樹子が完全におさえ切れなかったのか。一つの考え方として、「其在人也如竹箭之有广也、如松柏之有心也、二者居天下之大端矣。故貴四時而不改柯易葉」(礼記・礼器)、「歳寒然後知松柏之後凋也」(論語・子罕)などと云うから、「不逐四時彫」は必ずしも栢のみを指すのではなく、常緑樹一般を指すことになり、そこにギャップがあることになる。(趙州の無ではなく、無を一般化してしまつことになるが)長慶はそこを指摘したのではないかと考えられる。

・不是恍榔樹 恍榔樹は南方の樹木でシユロの一種。「是れ栢樹子ならず」と答えてよいところであるが、それをひねつてこちらなら、恍榔樹でない、というところだ、と言っている。ローカル色が出ており、穿つた見方をすれば南北両宗の対抗意識が出ている。

・恍榔樹不是 篁山の答えを言い直したもの。恍榔樹はちがつ。

師、上堂。因みに徒に示して云く、過去如許多そこばくの諸聖より、乃至、今時の老宿にいたるまで、出頭し来たりて盡く道う、我、願わくば一切の衆生を度し、道を成し果を成し、我と異なること無からしめん、と。灼然たり、吾が徒等の輩は、他の先聖の方便を承けざるが為に、今日什摩の処に向かつてか溝を填ぎ壑を塞がんこと。此の如しと然雖もしいえと、中に還た一人の具眼有りや。師代わつて云く、汝は天下人に問え、恠笑し得るや、と。

・填溝寒壑 のたれ死にする。

因みに挙す。古人道く、諸方は只だ殺人の刀有り、且つ活人の劔無し、と。時に学人有り、問う、如何なるか是れ活人の劔。師答えて曰く、我は老大漢、汝を礼拝すること能わす。

・古人道云々 卷九落浦の伝に夾山の言として出る。

・不能礼拝汝 礼拝したいけれども年でなあ、という語気。

師、僧に問う、我今原作都一問を置く、汝作摩生。对えて曰く、与摩ならば則ち一步を退かん。師云く、非時、作摩生。云く、和尚什摩に因りてか龍頭蛇尾なるや。師云く、汝は是れ作家。对えて曰く、未在、更に道え。師云く、我は汝に道うを辞せざるも、汝が會し去るを恐る。

師は僧に問う、私はいま一問をもつける、君はどうする。答える、そういうことなら一步しりぞきます。師が云う、非時はどうだ。云う、和尚はどうして龍頭蛇尾のですか。師は云う、君はやり手だ。答える、まだまだ、もっと言いなさい。師は云う、わしは君に言うのによぶさかではないが、君にそうだったのかと合点されるのがかなわん。

・我今置一問 置は致と音通。

・非時 師、弟子の秩序にない時、無礼講的な対等のとき。

問う、教中に言有り、師子は象を捉つるも亦た其の力を全うす、と。未審し今の什摩の力をか全うする。師答えて曰く、若し力を全うするを問わば、我は怕る。進んで云く、和尚什摩と為てか却つて学人を怕るる。師云く、汝の力を全うすること有るが為なり。

問う、經典に言っています、獅子は象をつかまえるにもその力を出しきる、と。いったいどんな力を出しきるのですか。師は答える、もし力を盡くすことを問うなら私は怕ろしい。進んで云う、和尚はどうして私を怕れられるのですか。師は云う、お前に全力を盡くすことがあるからだ。

問う、承るらく、古人に言有り、智不到の処、切に道著するを忌む。道著せば則ち頭角生ず、と。和尚如何ん。師答えて曰く、収進んで曰く、若し頭角無き処に向かつて収せば即ち大衆の恠豕を招かん。師云く、失錢遭罪。

問う、古人が言っているのを聞いています、智のいたらぬところを言いきることは避ける。言いきれば頭に角が生える、と。和尚はどうですか。師は答える、しまいこむ。進んで云う、もし頭角のないところでしまいこむなら、もの笑いになりますよ。師は言つ、身から出た錆の報いだ。

・和尚如何 智不到の処を道著して、しかも頭角を生じさせないことができるか、と問う。

因みに挙す。金剛經に云く、一切諸法皆是れ如の義。師却つて僧に問う、作摩生か是れ如の義。对えて云く、和尚は阿誰にか問う。師云く、忽ち道伴の相い借問するに遇わば、作摩生か伊かれに道わん。对えて云く、和尚は是れ什摩の心行ぞ。師肯わずして代わつて云く、何処にか与摩の道伴有る。

・和尚問阿誰 如の義をどうつかまえておられますか。

・忽遇道伴相借問云々 たくみに答えるだけでは許してやらぬとして第三者を持ちだしたものの。

雲門和尚、雪峯に嗣ぐ。韶州に在り。師諱は偃禪、蕪州、中吳府嘉興の人なり。姓は張。年十七にして空王寺澄律禪師の下に依り受業す。年己卯に登り、具尸羅を得たり。四分を南山に習い、三車を中道に聴く。辞して恥嶺に入り、纔かに象骨に登るや直に鵬程に奮つ。三礼施さんと欲するや雪峯便ち云く、何ぞ与摩に到るを得たる、と。師絲髪を移さずして、重ねて全機を印す。截流に等しと雖も、還た戴角に同じ。毎に参請に於いて闇に知見に契つ。後、甌恥に出で、韶州靈受に止まる。知聖大師密に通鑿を懐い、益す固く留連す。去世の後、住持を付囑す。南朝玄化を欽崇し、紫を賜い、匡真大師と號す。

・戴角 この文脈では、異類中行のような高い意味にはとれない。戴角の獸、たとえば牛のようであったということである。

・南朝 南漢を指す。

・重印全機 すでに睦州のところで印可を得ていたうえに雪峯のところで印可を得たことをいう。

・通鑿 両者の知見が通じ合うこと。

問つ、如何なるか是れ透法身の句。師云く、山を看よ。

・透法身 法身という次元をとりぬける、つきぬける。仏向上事に同じ。

・これに似た問答が、広録に二つ見える。問、如何是透法身句。師云、北斗裏藏身。および、問、如何是祖師西來意。師云、日裏看山。

師上堂して云く、汝若し會せざれば、三十年後、老漢を見ずと道つこと莫かれ。

お前さんがた、もし解らないのなら、いい年になって、わしに会わなかつたなどは云わせんぞ。

師に十二時の偈有り。

半夜子、命懸絲に似たるも猶お未だ許さず。因縁契會す刹那の間、了了分明にして一に氣無し。

・第二句 死の一步手前であるけれども、まだ死に去ることを許さない。許の字は当時「き」に近い音であった。ゆえに子の韻をふむ。

・第三句以下 刹那の間の因縁契會によつてはじめて完全に死に去ることになる。無氣は死んでいること。

鷄鳴丑、一歳の孫兒大いに哮吼す。實相圓明にして不思議、三世法身北斗に蔵る。^{かく}

・前の偈の死んだところから子供が生まれる。

平旦寅、三昧の圓光法身を證す。大千世界掌中に収む、色の髑體を透る誰か親しむを得ん。

・色透髑體 難解。髑體は法身の云いかえか。

・誰得親 したしみうるものが、さてあるだろうか。

日出卯、灸説心傳實教を道う。心心相印す自ら無心、玄妙の中に拙巧無し。

・第三句原文は心心相印息無心、息を自に改めて読む。

食時辰、恒沙世界は眼中の人。万法は皆な一法より生ず、一法の靈光誰か是れ隣りす。

・眼中人 常に心にかかっている人。

・誰是隣 誰得親にほぼ同じ。

禺中巳、分明歴歴として相似せず。靈源獨り曜き人の逢う少し、達者にして方めて知る慮る所無きことを。

日中、一部の笙歌誰か解く舞わん。逍遙として頓に入り無生に達す、晝夜の法螺法鼓を撃つ。

日ト末、灌頂す醍醐の最上味。一切諸佛及び菩提、唯だ仏のみ之を知る貴中の貴。

免時申、三壇等しく施し互いに賓と為る。無漏の果圓かにして一念に修む、六度同歸す浄土の因。

日入西、玄人途中に向いて走る莫し。黄葉浮需人を賺殺す、命盡きて讓惶たる是れ了手なり。

・了手 しめくくり。

黄昏戌、火を把つて牛を尋ぬる是れ底物ぞ。素躰もて相呈するも却つて非なりと道う、奴郎弁せず誰か屈を受く。

人定亥、三乗を把りて相正配する莫れ。此の意を知らんと要せば真宗を現ぜよ、密密心心三昧を超ゆ。

・人定 寝しずまる。

・把三乗相正配 三乗十二分教を系統だてること。

・そもそも十二時偈というものは、時間の進み方と内容の展開とが対応するものであるが、右の偈にはそれがみられない。

はじめから結論がでていて進展しない。はなはだ退屈である。

又た宗脉頌に曰く、如来の一大事、世間に出現す。五千の方便教、流傳すること幾百年。四十九年の説、未だ曾つて忤りて言を出さず。如来滅度の後、迦葉邊に付囑す。西天二十八、祖佛印して相傳う。達摩東土を觀じて、五葉氣相連ぬ。九年来面壁するも、唯だ喫茶の言有るのみ。二祖をば上首と為して、達摩は西天に廻る。六祖曹溪に住し、衣鉢は後ち傳えず。派分ること三五六、各各真源に達す。七八心忙乱し、空花

目前に墜つ。苦なる哉明眼の士、止啼錢を認得す。外道毀謗多くして、弟子生天を得たり。昔は靈山上に在り、今日獲て安然たり。六門俱に休歇し、無心にして處處に閑か。如しも玄中の客有らば、但だ人我の山を除く。一味の醍醐藥、万病悉く皆な安んず。因縁契會する者は、無心にして便ち安禪す。

師、因みに杖を把りて柱を打ち、問う、什摩の處より来たる。對えて云く、西天より来たる。師云く、什摩をかな作し来たる。對えて云く、唐土の衆生を教化し来たれり。師云く、我が唐土の衆生を欺あなごるか。却つて大衆に問う、還た會するや。對えて云く、不あ會。師、柱を打ちて云く、棄が今の両重の敗闕を打つ。師良久す。僧問う、何ぞ釈迦の當時に異なる。師云く、大衆立つこと久し。快すみやかに礼すること三拜せよ。

・冒頭の部分は師の自問自答である。

問う、如何なるか是れ超佛越祖の談。師云く、蒲州の麻黄、益州の符子。

・麻黄も符子も藥草で、強い毒性をもつ。

問う、一口に吞盡する時如何ん。師云く、老僧は棄が肚裏に在り。僧曰く、和尚什摩と為てか学人が肚裏に在る。師云く、我に話題を還し来たれ。

・一口吞盡 伝灯録八抛居士「參問馬祖云、不與萬法為侶者是什麼人。祖云、待汝一口吸盡西江水、即向汝道。」

・還我話頭來 さっきの話はどうしてくれるんだ。

問う、如何なるか是れ禪。師云く、露柱蝦蟆を吞む。僧云く、如何にして拳唱せば則ち來機に負かざらん。師云く、什摩をか道う。僧云く、還た來意を可とするや。師云く、且らく款款に問え。

師、僧に問う、諸方行来して道つ、我れ有ることを知る、と。且らく我が与めに三千大千世界を拈じて眼睫上に向かつて著せよ。学人應梭す。師云く、錢唐は國を去ること什摩と為てか三千里なる。

・知有 伝灯録十長沙景岑章「南泉云、狸奴白篡却知有、三世諸佛不知有。」師の最後のこたえ、國は長安をさす。三千大千世界はまつげの上にあるはずなのに、現実には錢唐と長安とは何故三千里もはなれているのか。

師、僧に問う、一切聲是れ佛聲、一切色是れ佛色、拈却し了らば汝が与めに道わん。对えて云く、拈却し了れり。師云く、与摩ならば驢年にし去らん。

・拈却 復唱すること。

・驢年去 口バの一生だ。

齊雲和尚、雪峯に嗣ぐ。師諱は靈照、東國の人なり。雪峯の密旨を傳えてより便ち浙江に住す。錢王欽重し、敬んで紫衣を賜う。真覺大師と號す。初め齋雲に居し、後ち鏡清、報慈、龍花に住す。四海の玄徒、長に法席に臻る。

師時有つて上堂す。云く、令を盡くし去らば存するが如く亡するが若し。私曲にし將ち来らば老学を礙著せん。与摩に相告報す、還た解く我を笑い得るや。時に人有つて問う、請う師、令を盡くせ。師云く、吽吽。

師はある時上堂して云う、法令をつくすと有つてもなきが如しだし、つくさないところを少し残しておいてやると、みなさん方のさまたげにならう。以上のようにみなさん方に云つてやるんだが、そういう私を笑いすることができるか。すると一人の学人が問う、どうぞ法令をつくして下さい。師が云う、吽吽。

・盡令 三 八五頁に盡法無民、一二九頁に盡法則無民とある。その盡法に同じ。意味は法の徹底と断滅との二重にとれる。
 ・如存若亡 老師四十一章に云つ、「上士聞道、勤而行之、中士聞道、若存若亡、下士聞道、大笑之」。今は老子の文脈からははずして理解した方がよい。

・哂哂 牛の鳴き声。無民のところか。

問つ、如何なるか是れ諸佛出身の處。師、少兒の名を喚ぶらく、法歸も亦た慶幸。僧云く、与摩ならば則ち只今什摩をか諱める。師云く、京に到りて京風有ることを知らず。

問つ、どのようなのが諸佛の出どころですか。師は小兒の名を呼んで云つ、法歸もめでたいことだ。僧が云つ、そういうことだと、いま何をばかっておられるのですか。師が云つ、お前は京にやって来ておりながら、京には京の風があるということを知らなご。

・僧は、師が肝甚のところをつまきはぐらかして答えたを受け取り、何を遠慮していらっしゃるのですか、と問つたのであつた。

問つ、此今の門風、如何にしてか継紹せん。師云く、昔年は漢主、今日は吾が君。

問つ、師の門風は、今後どのように受けついだものでしょう。師が云つ、昔は漢主であつたが、今は天子だ。

・はじめ漢の主であつた高祖がのち天下全体の主となつたように、そつう風に紹いでくれ、と云つ師の意であつた。

師 報慈に住せし時、開堂の日に云く、帝子王孫及び四衆雲集せり。金枝玉葉未だ王宮を離れず、及び諸の高班の君子、等しく猶お貴居に在り、乃至諸寺の大師大徳、只た本寺に在る、正當与摩の時、微僧、早に与に相看し了れり。中に於いて還た省察する者有りや。諸の仁者、纔かに門を跨がんと擬するや万里に郷閩原作開を望む。豈に況や報慈に到らば何れの處か更に有らん。与摩に語話すること上人を輕触す

ること莫きや。放過せざれば一場の禍事。此の如しと雖も、断絶す可からず。今時中に於いて還た懷疑する者有りや。快に出で来たれ。時に人有つて出で来り問つ承るらく、師に言有り、未だ本處を離れずして、早に与に相看し了れり、と未審いぶかし未だ本處を離れず、什摩の處か是れ衆人と相看する處。師云く、阿棄、若し我が力を得ざれば、争でか解よく此の問を行じ得ん。

・微僧 謙称である。

・相看 原文は早与相著了也とあるが、意味が通りにくいのでいま相看に改めて読む。それぞれがそれぞれの家におられる間に、わたしは皆さんにお目にかかりました。

・纒かに門を以下、報慈にやつて来ようとして、自分の家の門を皆さんがまたごうとしたとたん、本来の家郷はるか彼方ということになる。ましてこの報慈に來た以上、どこにいまさらそんなものがあるつか。(わしの門に入ることによって、本来の家郷に入ることができるなどと勘違いしてもらっては困る。そんなものはどこにもありはしない。こんな風な云い方をしたら皆さんの氣に障るだろつか。ところでそれをほっておくというのなら何をか云わんやである。もしほっておかないとなると大変なことになる。といっても、それを断ち切ってしまうてもいけない。いま誰か疑問をいだくものがあるか。

・僧の問い、開堂の時の師の言葉を要約して問うている。どういふところが、師が本處を離れずに衆人と会つところですか。
・師の答え、お前がそういう(良い)質問を出せたのは、私のおかげではないのか。質問をほめたもの。なお原文に、争解形得此問とあるが、形の字を行に改めて読む。

問つ、寸絲も露れざる時如何ん。師云く、隱密なり。僧云く、与摩ならば則ち面の露わすべき無けん。師云く、林下の月彩は人の撮るに足る。

問つ、糸ひとすじ見えない時どうですか。師が云つ、かくれている。僧が云つ、それでは外に表すべき顔がないということですね。師が云つ、林をへだたせていてもお月さんは取ってくれろといわんばかりだ。

・寸絲不露 赤裸々、露堂堂。

・師の答えは、かくれているけれども、見る目にはそれがちゃんと見てとれる。お前はそれを見てとらなければならぬ。

問う、諸聖會中、還た位に排せられざる者有りや。師云く、諸聖會中は則ち且く置く。什摩を呼んで不排位と作すや。僧云く、与摩ならば則ち出身するに路無けん。師云く、玉も雪に處せざれば那ぞ堅貞を辨せん。

問う、諸聖の會中に、聖者の位にはまりきらない人が居ますか。師が云う、諸聖の會中というのはまあおいておこう。位にはまりきらないとはどういふことなのだ。僧が云う、そういうことならまるで手がかりがありませんね。師が云う、玉も雪と對比させなければ固さがわからない。

因みに百丈侍者を打つ因縁を説く。人有つて拈じて問う、百丈侍者を打つは、上座の為に打つや、侍者の為に打つや。師云く、里正了せざれば累家丁に及ぶ。

・卷十四百丈章 師教侍者問第一座、實際理地不受一塵、佛事門中不捨一法、是了義教裏収、是不了義教裏収。第一座云、是了義教裏収。侍者却來拳似和尚。和尚便打侍者、趁出院。」

・僧の問い、百丈が侍者を打つたのは、上座にねらいがあつたのか、それとも侍者にねらいがあつたのか。

・師の答え、里正がしっかりしていないから、村の男達に迷惑が及ぶ。里正は名主、庄屋のたぐい。ここでは百丈を指す。

師問招慶、事須有与摩道不被人検点、初機後学、又須得力、自古先德苗稼是什摩次第附得某甲、此間請和尚擇。招慶擇云、放曠長如癡兀人、他家自有通人愛。

・師の質問は意味が取れない。招慶の答えは、放曠なること長に癡兀人の如し、他家自ら通人の愛有りと読むのであろう。テキスト

に問題がありそうである。

問う、未だ問いを納れざる前、請う、師指示せよ。師云く、什摩の道理をか成す。僧云く、已に師の意を領せり。師云く、壁を獻じて刑を加う。

・納問 問いを発すること。

因みに措多古寺に入る。僧に問う、此の寺は名は何摩ぞ。其の僧名額を知らず。措多遂に一首の詩を作りて曰く、此の寺は何年に造れるか、僧に問えども僧は知らず。馬を繋ぐ枯松の下、塵を拂つて古碑を読む。有る人拈じて師に問う、碑文は何摩と道うぞ。師云く、三蔵、室に入る。

・措多 措大に同じ。読書人の意。

師、招慶に問う、作摩生か是れ機に投じて未だ肯わざるが如くする。招慶曰く、茶に遇えば即ち喫す。師曰く、適来、立つこと久しくして脚軫痛す。招慶却つて問う、什摩れの處か是れ塵を成す處。請う兄擇べ。師云く、即ち此れ猛く提取す。招慶之を肯う。

・提取 表面にもち上げる。

師有る時上堂す。驀地に立ち来り、手を伸べて云く、乞取些子、乞取些子。又云く、一人虚を傳つれば、万人実を傳う。

師はある時上堂し、にわか立ちあがつて手をのびして云う、少しおめぐみ下さい、少しおめぐみ下さい。また云う、一人が虚を伝えると、万人は実を伝える。

・乞取些子 物乞いの時のセリフ。

・一犬吠虚、萬犬傳實。潜夫論賢難に諺曰として、「一犬吠形、百犬吠聲、世之疾、此固久矣哉」。もともと事実無根のことが、多くの人々に伝承されているうちに事実となる。

問う、古人言有り、無言無説にして不二法門に直入す、と。文殊与摩に道うは還た長老の意に称い得るや。師云く、国を理めんと比擬して却つて家破る。

・古人有言 維摩経入不二法門品。

・比擬理国却家破 国を治めようとした当人が、自分の家をだめにしたこと。文殊の賛嘆によつて維摩の一黙が言説の世界に入ってしまった。

問う、靈山會上、法相相い伝う、未審しいぶか齊雲何を將つて人に付嘱すや。云く、汝一个の為に齊雲山を荒却する可からず。僧云く、便ち是れ親付嘱なること莫きや。師云く、大衆をして笑わしむること莫れ。

師一日、僧の上来して立つを見る次いで、物を竖起して問う、棄道え、這个は那个と別か別ならざるか。僧無对。師代わつて云く、別なれば則ち眼、山を見、別ならざれば則ち山、眼を見る。

問う、向上の一路、千聖も伝えず。未審しいぶか是れ什摩人なれば則ち能く伝え得るや。師云く、千聖も也た我を疑う。僧云く、便ち是れ伝つる底の人なること莫きや。師云く、晉帝は満康を斬る。

問う、仏の上のみちは、千聖も伝えていません。一体どんな人なら、伝えられるのですか。師が云つ、千聖もあれらしいとにらんでいる。僧が云つ、伝えた人なんです。師が云つ、晉帝は満康(千聖否定者)を切った。

師上堂して偏立す。告げて云く、此の座に昇ることを要せざること莫きや。雲禪大師云く、仁（原作人）義道中。自ら代わつて云く、大衆還た昧悉するや。

師は上堂し、すみに立つて告げる、この座にのぼらんでもいいんじゃないかな。雲禪大師が云つ、人の踏むべき道でしょう。自ら代わつて云う、皆さんはちゃんとわかつたか。

師初めて龍華に入る。上堂して云く、宗門の妙理は別時に一論せん。若也（も）大道の玄網ならば三界を包んで一門と為し、盡十方を正眼と為す。世尊靈山説法の後、摩訶迦葉に付囑し、祖祖相継ぎ、法法相傳つ。南天（竺）國王太子、栄を捨てて出家してより、呼んで達摩大師と為す。仏の心印を伝えて特に致原作置し、十万八千里を過ぎ来たれり。告げて曰く、吾本此の土に來たりて、教を傳え迷情を救つ、と。以て千來年を経得て、真風は替わらず。我が呉越國の大祖、世皇、佛法を崇敬す。當今の殿下、三宝を敬重し、大乘を興闡す。皆是れ靈山に仏の付囑を受け來たるものなり。大師、令公、大士を邀請して歸朝し、内道場に入らしめ供養す。兼ねて造寺の功德を宜下さる。當寺は便ち是れ弥勒の内苑なるを以て、宝塔に大士の真身を安ず。又た是れ令公の興建なれば、地久天長にして、古今有ること罕なり。播して四海に在り、八方知聞す。昨者（さきごろ）、伏して聖恩の宣賜を蒙り、當寺に住持して玄徒を聚ることを許さる。敢えて率（ひき）いて以て焚修し、一心に勵めて聖躬に報答せざらんや。

許して從容を賜る、事有らば近前せよ。時に学人有りて問う、只だ龍花の會の如きは、何ぞ靈山に異らん。師云く、化城は一級（たぐら）を較（くら）（原作教）ぶ。僧云く、与摩ならば則ち彼彼相い羨ます。師云く、前言は終に虚施せず。僧云く、未審し當初、靈山に合（は）た何の法をか談ずる。師云く、道うを見ずや、世尊は不説にして説き、迦葉は不聞にして聞く、と僧云く、与摩なれば則ち王の居殿を覩ずして、焉ぞ天子の尊を知らん。師云く、酌然たり、瞻敬することは則ち分有ること。

・化城較一級 化城の塔とは一層ほどちがう。

師、僧に問う、什摩をか作す。云く、佛身上の塵を掃く。云く、既に是れ仏なるに什摩と為てか却つて塵有る。僧対無し。自ら代わつて云く、道うを見ずや、金屑貴しと雖も、と。

問う、古人言有り、佛に正法眼有りて、摩訶迦葉に付嘱す、と。如何なるか是れ正法眼。師云く、金屑は貴しと雖も。僧云く、正法眼は又た作摩生。師云く、也た須らく龍花に惜む人有るを知るべし。

・也須知有龍花惜人 金屑を大事がるお前みたいな奴がいるのだということがわしにはしかと解つた。

人有り問う、某甲下山し去りて、忽し人有つて、龍花に什摩の消息有り、と問はば、かれ他に向かつて作摩生か道わん。師云く、但だ他に向かつて道へ、馬鳴龍樹は白槌の下、と。

・馬鳴龍樹白槌下 白槌をする人が誰であるかによって少し意味が異なる。齊雲自身が白槌する場合は、馬鳴・龍樹もその白槌の下つまり龍花山の聴衆の中に居るのだ、といつことになり、馬鳴・龍樹が白槌する場合は、彼らが大眾の面前で龍花の法の正しさを証明している、といつ意味になる。なお後者の場合は、馬鳴龍樹の白槌の下」となる。

問う、不二の言、請う師道え。師云く、摩竭の令に遵わず、誰か毘耶の理を談ぜん。

問う、入不二法門の言をどうかおっしゃって下さい。師が云う、釈迦の摩竭の教令にさえ遵わない。誰が維摩の毘耶の真理を語るものか。

・不二言云々 質問の意味は「維摩の默然無言というふうな立場を認めないでおっしゃって下さい。師が維摩になりかわつて維摩に口を開かせてください」といつこと。

・不遵摩竭云々「釈迦掩室於摩竭、浄名杜口於毘耶」を二つに分けて答えたもの。釈迦のやり方にさえ従わないし、維摩のまねなぞもしないぞ。語と黙とを通ぜしめる立場。

麗天和尚、無著の文殊に対する話を頌す。頌に曰く清涼に感現す聖伽藍親しく文殊に対して話談を接す。言下に通ぜず好き消息、頭を廻らせば只だ見る翠山岳。師頌に和して曰く、沙界に遍周しあまね聖伽藍、觸處に文殊と話談を共にす。若し門上に消息を覓むるあらば、誰か能く敢えて道わん翠山岳。

問う、古人言有り、窟中の細、細中の麤、と。如何なるかはれ窟中の細。師曰く、佛病最も治し難し。進みて曰う、師は還た治するや。師云く、作摩か得ざらん。僧曰く、如何んが治し得る。師云く、喫茶、喫飯。

問う、古人が言っています。窟中の細、細中の麤、と。窟中の細とはどういふことですか。師が云う、佛病は極めて治しにくい。一歩進んで問う、師は治されますか。師が云う、どうして治せないものか。質問した僧が云う、どのようにして治すことができますか。師が云う、茶を飲み、飯を食う。

・窟中之細、細中之麤 出典は大乗起信論。

・佛病 理障とか法執を指している。禅関策進(鵝湖大義禅師垂誠)に「莫只忘形與死心、此箇難醫病最深」という「病」と通じるところもある。

永福和尚、雪峯に嗣ぐ。福州に在り。師、諱は從楸、福州恥嶼の人なり。姓は陳、雪峯山に於いて出家す。依年具戒し、密に玄関に契う。遍く呉楚に遊び、却つて歐恥かえに復る。初め柔南・報恩に住し、後永福に居す。恥王欽敬し、紫と號超證大師を賜う。

師、時有りて上堂す。繩床の一边に立つて云く、二尊は並び化せず。便ち方丈に帰る。

師がある時上堂され、繩床の一边に立つておっしゃる、二尊はいっしょには教化しない。さつさと方丈に帰られた。

問う、教中に言有り、十方佛土中、唯だ一乗の法のみ有り、二無く亦た三無し、と如何なるか是れ一乗の法。師云く、汝道え、我が這裏に在りて今の什摩を為すかを。僧云く、与摩なれば則ち古人を知らず去るなり。師云く、此くの如しと雖然も、却て汝に辜負せず。

問う、教中に言っています、十方佛土中唯だ一乗の法のみ有り、二無く亦た三無し、と。一乗の法とはどういふものですか。師が云う、わしが今ここで何をしているか言ってみる。僧が云う、では古人のことは知ったことではないとされるのですか。師が云う、だからといっておまえさんに負っているわけではない。

・教中有言云々 法華經方便品「十方佛土中、唯一乘法、無二亦無三、除佛方便説」。

・汝道云々 古人の説いた經文のことよりも、今のわしがどう生きているかを言ってみるといふ意味。そこで僧がびっくりして次ぎの言葉を言ったのである。

・雖然如此云々 わしがこう言つのは、古人の教えに依存しているせつかくのおまえの期待とつらはらるることを言つて、おまえをむげに斥けているのではない、という意味。

問う、諸餘は則ち敢えて問わず。省要の處、師、慈を垂れたまわんことを乞ふ。師云く、快すみやわに礼拝せずして、更に何時をか待たん。

問う、よけいなことは敢えて問いません。どうかそのものずばりのところをおっしゃって下さい。師が云う、さつさと礼拝しないでいつまでボヤボヤしているのか。

・快不礼拝云々 おまえさんはまだ諸余のところにいるではないか。本当に省要の處ならば礼三拝すべきだ。

因みに挙す。長慶上堂して云く、法を盡くせば則ち民無し、と。永福は則ち然らず。若し法を盡くさざれば争か民有ることを得ん。因みに挙す、長慶が上堂して云っている、法律どおりにやると、民がいなくなる、と。永福わしはそのようには言わない。法律どおりにやるからこそ民が有るのだ。

・盡法則無民 卷十一 保福の条に見える。

人有りて趙州に問う、古人道えらく、至道無難、唯嫌揀擇と如何なるか是れ不揀擇底の法、趙州云く、天上天下、唯我独尊。僧云く、此は猶お是れ揀擇底の法。州云く、田舎奴。天上天下、唯我独尊。什摩の處か是れ揀擇ぞ。人有りて挙して長慶に問う、如何なるか是れ不揀擇底の法、慶云く、我に有異底の法を還し来たれ。師挙するを聞きて云く、此の兩人、惣べて揀擇中に在りて収まる。僧便ち問う、如何なるか是れ不揀擇底の法。師云く、今日は是れ幾ぞ。後、長慶挙するを聞きて云く、須く道うべし、超證に親疎ありや。他かれの与摩に道うこと無し。

ある人が趙州に問う、古人が言っています、至道無難、唯嫌揀擇と。どういふのが不揀擇底の法ですか。趙州が云う、天上天下、唯我独尊。僧が云う、これはなお揀擇底の法です。趙州が云う、田舎者め、天上天下、唯我独尊。どこが揀擇だ。ある人がこの問答をとりあげて長慶に問う、どういふのが不揀擇底の法ですか。長慶が云う、わしに異った法を持ってこい。師が以上の問答を聞いて云う、この兩人は、どちらも揀擇中に陥っている。僧がそこで問う、どういふのが不揀擇底の法ですか。師が云う、今日は何日か。そののち長慶がこの師の話の話を聞いて云う、さあ云ってみろ、超證に親疎があるのかどうかを。彼があんな風に云うことはないのだ。

・人有問趙州云々 趙州録卷中、碧巖録第五十七則参照。

・還來我有異底之法 ちがいのある法を見せてくれるなら、わしの不揀擇の法を見せてやろう。

・此兩人云々 兩人は趙州と長慶を指す。が主として長慶に対する批評である。二人とも「不揀擇」と「揀擇」とを揀擇して、不揀擇という揀擇の中におちこんでいる、という気持ちがある。

・今日は幾日「今日は何日」かは、言葉で揀擇する以前に決まっている。そこを突いたもの。

・他無与摩道 長慶が超證の自分に対する批評を聞いて言ったもの。その批判する超證自身が趙州や長慶に対して親疎があるのかどうかを言ってみる。親疎がないのにことさら親疎があるような言い方をすることはないだろう。

福清和尚、雪峯に嗣ぐ。泉州に在り。師、諱は玄訥、東國の人なり。泉州の王太尉、師の道德を仰ぎ、轉法輪を請う。紫衣を敬奏す。

問う、如何なるか是れ人王。師云く、一手は天を指し、一手は地を指す。如何なるか是れ法王。師云く、手の天を指す無く、手の地を指す無し。学曰く、人王は法王と相い去ること幾何ぞ。師云く、汝自ら断じ看よ。進みて云く、学人断じ得ず。却つて請う、和尚断ぜよ。師云く、来年更に新條の在ること有り、春光に悩乱し卒に未だ休まざらん。

問う、どういふのが人王ですか。師が云う、片手は天を指し、片手は地を指す。どういふのが法王ですか。師が云う、手が天を指すことも地を指すこともない。学人が云う、人王は法王と、どれほどの隔たりがありますか。師が云う、おまえさんが自分で判断してみる。進んで云う、私は判断することができません。そこで和尚さん、どうか判断して下さい。師が云う、来年また新しい枝が出てきて、春光の下で乱れ乱れていつまでも止まないことだろう。

・来年更有新條在云々 羅隱の「柳」という詩の引用。「一族青煙鎖玉樓、半垂闌畔半垂溝。明年更有新條在、繞乱春風卒未休」。この二句は人間の煩惱を喩える時によく引かれる。ここでは人王のことを言ったもの。人王を離れて法王はない。

問う、如何なるか是れ菩提。師云く、闍梨半年の糧を失却す。学云く、什摩と為てか半年の糧を失却する。師云く、只だ他の一斗米を圖るが為なり。

問う、どういづのが菩提ですか。師が云う、おまえさんは半年分の糧食を失ってしまった。学人が云う、どうして半年分の糧食を失ってしまったのですか。師が云う、あの一斗米を追い求めていたがためだ。

・一斗米 菩提を問題にしたことを指す(伝灯録では触目菩提)。一斗は唐七(十世紀)では5.94リットル。宋元十(十四世紀)では9.488リットル。ほぼ一日の糧食に当たる。師の言葉の意味は、目先のその日だけのことを問題にして、長い期間のことを忘れている。あくせくした問い方だ、ということ。

問う、圓伊二点は人皆な信ず。靈秀の家風の事若何いかん。師云く、靈秀の家風は且まくま従まさん、是れ汝の家風は作摩生。学云く、学人未だ現ぜざるを争奈何せん。師云く、阿誰か棄をして不會ならしむる。

問う、圓伊二点は人が皆な信じます。靈秀の家風はどうでしょうか。師が云う、靈秀の家風はまあ置いておくとして、おまえさんの家風はどうだ。学人が云う、私はまだ家風が現れていないのをどうしましょう。師が云う、誰がおまえさんをわからなくさせたのか。

・靈秀 不明。師の賜号か。

・阿誰教棄不會 よくわからぬ。「家風が現れていない」と答えたのに対して、「その家風が現れていない」のはどこから出て来たのか、という方向の言葉であろうか。

潮山和尚、雪峯に嗣ぐ。吉州に在り。師諱は延宗、泉州卅田縣の人なり。

僧問う、和尚は是れ咸通前に住するや、咸通後に住するや。師云く、嗚。学人再び問を申ぶ。師乃ち云く、病鳥蘆に栖み、困魚泊

に止まる。

僧が問う、和尚さんは咸通前からこの山に住しておられますか、それとも咸通後に住されましたか。師が云う、シャ。学人は再問する。そこで師が云う、病鳥は蘆の中に住み、水気の切れかかった魚は水たまりに止まる。

・咸通 唐代の年号(八六〇〜八七三)。五灯会元撫州疎山匡仁の伝に「疎山上堂 病僧咸通年前會得法身辺事、咸通年後會得法身上事云々」とある。この語を前提とした問いか。あるいは、咸通というのは雪峯義存がはじめて雪峯山に入った年である。雪峯の法系が成立していく過程で一つの区切りとなる年号であったかも知れない。とすれば、和尚さんは雪峯が山に入る前の法をついだのか、山に入って後の法をついだのかという問いにもなる。

・嘸 前後の区別を絶ったところ。

・病鳥云々 宝蔵論一に「有妄曰愚、無妄曰眞、眞氷釋水、妄水結氷、氷水之一、其體不異。迷妄曰愚、惺眞曰智、其氷也冬不可釋、其水也春不可結、故愚不可即改、智不可即待。漸釋漸消、以通乎大海、斯可謂自然之道、運用玄玄、非念慮所測。當可以綿綿、不可以勤勤。夫進道之由、中有萬途。困魚止瀝、病鳥棲蘆、其二者不識於大海、不識於叢林。人趨乎小道、其義亦然。此可謂久功中止、不達如理、捨大求小、半路依止、以小安而自安、不及大安而安矣」とあるのにもとづく。この語は一段ひくいを指す意味に用いられることが多いようである。たとえば卷十一(五七頁)翠巖和尚の示後学偈に「入門須有語、不語病栖蘆、應須滿口道、莫教帶有無」とあるのなど一例であろう。しかし宝蔵論の文脈においては、必ずしも一段ひくいとと理解する必要はないであろう。今の場合も、病鳥がそこ以外にない所として蘆に住むように、また息の切れかかった魚が水たまりに安住するように、吉州に住んでいるという師の気持ちを示すものと解すべきであろう。

問う、師久しく何の業を修して此の山に隠るるや。師云く、什摩の処にかこの消息を得たる。学人應梭す。師は之を叱す。

問う、師はどういう修行をされて此の山に住まわれるようになったのですか。師が云う、どこでそんなことを聞いて来た。学

人は「はい」という。師はこれを叱る。

・ 这个消息 何か曰くがありそうだというつわさ。伝灯録卷七大梅法常の伝に「大寂闍師住山、乃令一僧到問云、和尚見馬師得箇什麼、便住此山」というのと、同じ趣旨の質問である。

・ 学人応梭 師の反問への答えではなく、「ははあ」という型通りの返事である。

問う、如何なるか是れ学人の自己。師云く、争でか人の謾を受けん。

問う、何が私の自己でしょうか。師が云う、だまされるものか。

惟勤禅師、雪峯に嗣ぐ、南嶽般舟道場に在り。生縁は福州永泰縣の人なり。雪峯に参見して便ち玄旨に契つてより、五頂に経遊し、南北の樓林に遍く宗師を探る。推して匠伯と為す。後、南嶽に棲む。平生の苦節、寰海に名を播く。続宝林、鏡燈、週色、防邪論を編み、并せて釈贊を挿す。廣く世に流る。楚王欽仰し迎えて嶽を出でんことを請う。府廷に留駐し、教網の記綱と為り、祖天の日月と作る。報恩の東蔵に住持す。奏して紫衣を賜い、宝文大師と號す。

・ 続宝林 現存せず。

・ 鏡燈 次出。

・ 週色 宗鏡録卷三十八(大正四八 六四二)に引かれている。

・ 防邪論 現存せず。

・ 釈贊 現存せず。あるいは伝灯録二九にのせる覚地頌を指すか。

・ 挿 撰の字の誤りか。

・ 祖天 不明。

師、因みに鏡燈に讚する頌に曰く、偉なる哉眞智の士、能く方便の津を開く。一燈一鉢を明らめ、十鏡十身を現す。身身相い映原作估涉し、燈燈互いの因と作る。層層として身土廣く、重重として理事測し。儼として微塵の佛を覩、等しく毘目仙に逢う。海印茲より顯れ、帝網の義由りて詮る。一塵法界を説き、一切塵も亦た然り。五蘊十八界、寂と用と躰俱に全し。圓光鏡と像とを含み、一異宣ぶ可からず。斯の無碍の境に達せば、遮那法報圓なり。

又た象骨の偈を述べて曰く、象骨英雄として世を挙げて尊び、盡乾坤を統べて是れ一門たらしむ。詞惠未だ接せざるに承當せば好し、言教を待ちて句裏に傳つること莫れ。擬議すれば終に山海の隔を成さん、壁面の渾機ならば直下に全し。更に他^かの泥牛の吼ゆるを會せんと欲せば、審細に須らく木馬の嘶を聴くべし。

・ 詞惠未云々 言詮にわたらぬ前に旨を受けとめねばならぬ。

・ 嘶の字は韻を失っている。何かの字の誤りであろうか。

如躰禪師の雄の頌に曰く、古曲聲を発すること雄にして、今古唱つること還た同じ。若し第一拍を論ぜば、祖佛盡く蹤を迷わす。長慶拈じて僧に問う、只だ祖佛盡く蹤を迷わすが如きは、个の什摩辺の事を成得するや。対えて云く、个の佛未出世時の事、黒豆未生芽時の事を成得す。慶云く、只だ佛未出世時の事、黒豆未生芽時の事の如きは、个の什摩辺の事を成得すや。対えて云く、某甲は這裏に到りては拳し得ず。未審し、和尚如何ん。慶云く、个の痕縫を絶する辺の事を成得す。

・ そっくり同じものがすでに三六八頁に出ている。長慶の最後の語は、成得个痕縫辺事とあるが、前出のものにより絶の字を補って読む。絶痕縫辺とは完全無欠の世界、手がかりを何も与えず、それでいて自己完結している世界をいう。

・ 黒豆は文字を指す。

・頌は伝灯録十九福州芙蓉山如体禪師の伝に出ている。なお何故この商量が惟勁の所に収められているのか不明であるが、恐らくは惟勁の拈弄が落ちてしまったものか。

師又た頌して曰く、学道は火を攢るが如くす、煙に逢つても且お休むる莫れ。直に金星の現わるるを得て、家に帰りて始めて到頭なり。人有つて挙して中招慶に問う、古人言有り、直に金星の現わるるを得て、家に帰りて始めて到頭なり、と如何なるか是れ金星現わるる。慶云く、我は道つ、直得^{たとい}金星現わるるも也た未だ是れ到頭ならず、と僧云く、作摩生。慶云く、茶に遇つては茶を喫し、飯に遇つては飯を喫す。

師は又頌を作つていう、学道は火を鑽るようなものだ、煙が出ても手をやめてはならない。金星が出て、家に帰つてやつと終わりだ。ある人がこれをとあげて中招慶に問うた。古人が言つております、金星が現れて、家に帰つてやつと終わりだ、と。金星が現れるとはどういうことですか。招慶が云う、わしならこう云う、たとえ金星が現れてもまだ終わりじゃない、と。僧が云う、どのように終わりでないのですか。招慶が云う、茶を飲んだり、御飯を喰べたりしなきゃならん。

・金星 ここでは宵の明星をいっているのであるが、釈尊成道の故事をも踏まえるであろう。

・帰家 本来の家郷に帰ることを寓意する。

越山鑿眞大師、雪峯に嗣ぐ。錢王欽敬して紫を賜つ。師因みに写真を覩て、偈有りて曰く、眞の本源、頂足方圓。弥淪して壊せず、實相にして無辺。恒沙の劫数、古今現前す。需のごとく起こりて需のごとく滅し、空手空拳。此の相陣は、三界も亦た然り。

・頂足方円 不明。

師、三種病人に頌して曰く、盲聾瘡唾格調高し、是れ何の境界にして自ら擔荷すや。昔日曾つて玄沙の道に嚮いしも、張三季四の歌を笑殺す。

・玄沙批判である。昔は高い境界として慕ったが、今は張三季四のようなつまらぬものの歌として笑いとばす。なお、碧巖録八十八則
参照。

・是何境界云々 どういう境界のものとして自ら擔荷していたのか。

睡龍和尚、雪峯に嗣ぐ。泉州に在り。師、號は道溥、姓は鄭、福唐縣の人なり。寶林院に出家し、依年具戒す。便ち雪峯に參見し、密に玄關に契つ。更に他往無し。後、清原の王大尉、徳の高きを欽仰し、五峯に住せんことを請つ。旋いで紫衣を奏し、號、弘教大師を錫えり。

有る時、僧の參する次いで、時に于いて云く、空山に祇対すべきもの無しと道つことなかれ。便ち起ちて丈室に歸る。

ある時、僧が參したが、その時に云われた、空山は話相手にならないなどと言つてはならん。そこで起ち上がつて方丈に歸られた。

・于時云々 師のこの言葉以前に何か省略されている感じである。僧が參してしばらく時があつてからこつ言つたのである。師はその間、空山のごとく終始黙然としており、僧は質問できなかつたのであろう。

俗官有り。黄檗の供養主に問う、黄檗和尚は驢馬に相似たり。上座、供養主と作りて什摩をか作す。僧無對。却歸りて黄檗に拳似す。黄檗云く、道薄く人微にして甚だ是れ消もちい難し。人有りて南泉に拳似す。南泉云く、池州の麻黄、蜀地の當歸。人有りて師に拳似す。師云く、泉州の葛布、汗衫を造るに好し。

ある俗官が、黄檗の供養主に問うた、黄檗和尚は驢馬に似ている。あなたは供養主になってどうしようというのか。僧は答えない。歸つて黄檗に拳似する。黄檗が云う、道がすたれ、人が卑しく、全くどうしようもない。ある人が南泉に拳似する。南泉が云

う、池州の麻黄、蜀地の當歸。ある人が師に拳似する。師が云う、泉州の葛布は汗衫を造るのによい。

・ 供養主 街坊化主のこと。

・ 道薄人微 俗官と、それを教化できなかった供養主の両方を指しているとも考えられる。

・ 消 受容すること、用いること。

・ 南泉云々々 南泉の語は、黄檗に対する一つのアンチテーゼを出したのか。「わしなら池州の麻黄・蜀地の當歸を供養するが、それを黄檗がどう受容するか見てやろつ」。

・ 師云く云々 南泉の語を受けたものである。麻黄、當歸は発汗剤・毒薬であるから、汗衫を作ることによって麻黄當歸を受容する。「では汗衫を作りましょう」。

問う、古人言有り、珠を含んで吐かざれば、誰か賣あるを知らん、と。含珠は則ち問わず。便ち請う、吐かれんことを。師云く、看る者は甚だ多きも、弁ずる者は甚だ少なし。

問う、古人が言っています。珠を含んで吐かなかつたら、賣のあることを誰が知ろつか、と。珠を含むということは問いません。どうか吐いてください。師が云う、(吐いた真珠を見るものは甚だ多いが、見てそれと識るものは甚だ少ない。

・ 看看甚多云々 もう吐いているのにおまえにはわからない、ということ。

問う、如何なるか是れ学人の自己の事。師云く、是れ棄自己ならずして什摩ぞ。

問う、どういふのは学人の自己の事ですか。師が云う、おまえさん自己でなくて何だ。

問う、大尉相公繩床を送る。和尚は何を將つて報答するや。師曰く、天津橋上異路無し、報答の心は性殊ならず。僧云く、与摩な

れば則ち相公慙懃、師之不謬。師云く、我れ毘盧點頭せずと道う、棄は作摩生。僧云く、学人は這裏に到りては直に言の進むべき無きを得たり。師云く、饒い棄与摩なるも、また老師と一蝗地を較す。

問う、大尉相公が繩床を送られました和尚さんは何で報答されますか。師が云う、天津橋上には異路がない。報答の心は性として殊ならない。僧が云う、では相公のねんころな気持ちに対して、師も負かれないのですね。師が云う、わしは毘盧舎那はつなずかない、と言っているのだ。おまえさんはどうなのか。僧が云う、私はここに到っては全くもつこれ以上言つべき言葉がありません。師が云う、たといおまえさんがそうだとしても、わしとはまだ一段階差があるのだ。

・報答之心云々 後に「毘盧不點頭」と言っているから、報答の気持ちはとりたてて異質のものがあるわけではない。

・師之不謬 このままでは読めない。「之」は誤字であろう。ただし、この句の意味は、相公の慙懃な気持ちに対して、師もそれに負かず、それに応じて報答する、という方向を指す。

・我道毘盧不點頭 毘盧舎那は布施に対して、感謝などの何らかの意志表示はしない。

・饒棄与摩云々 僧が「直得無言可進」と言ったのは高い次元に於いてであるとしなければ、「較一蝗」という評は出てこないはずである。

問う、学人、乍人樓林なり。乞う和尚、个の入路を指示せられんことを。師良久す。学人礼拝す。師云く、汝は阿誰に礼拝するや。学云く、和尚に礼拝す。師云く、汝若し會せば、即ち是れ汝は汝に礼拝す。汝若し不會ならば、即ち是れ老僧に礼拝す。

問う、私は樓林に入ったばかりです。どうか和尚さん、入路をお示し下さい。師は良久した。学人は礼拝する。師が云う、おまえさんは誰に礼拝するのか。学人が云う、和尚さんに礼拝します。師が云う、おまえさんがもしわかっているのなら、おまえさん自身に礼拝することになる。もしわかっていないければ、わしに礼拝することになる。

問う、如何なるか是れ古佛の心。師云く、我れは委す、棄の古佛の心を問わざるを。

問う、古佛の心とはどういのですか。師が云う、わしには、おまえさんが古佛の心を問うていないことがちゃんとわかる。

・我委云々 なぜ自分がそれを問わねばならないか、そこがない。

問う、如何なるか是れ佛。師云く、觀面に相い呈すも由なお識らず、佛を問うの人焉んぞ能く委せんや。

問う、佛とはどういのですか。師が云う、まのあたりに差し出されていてもなおそれとは知らない。そんな奴が佛を問うたつて、どうしてわかることができよう。

師、三種病人を頌して曰く、奇なるかな大師の唾盲聾、善く能く方便して真宗を唱う。為めに報ず知音須く帶會すべし、意句を將つて競い來たりて通ぜしむることなかれ。

・帶會 不明。

・莫將意句云々 意句で三種病人の理を解釈しようとしてはならない。

問う、教中に言有り、羅嵯羅密行す、と。如何なるか是れ密行。師云く、汝は是れ龐人、争でか委するを得ん。学云く、和尚は還た委し得るや。師云く、委せず。学云く、和尚は何摩と為てか委せざる。師云く、若し委せば則ち密にし去らず。

問う、教中に言っています、羅嵯羅は密行する、と。どういのが密行ですか。師が答えて云う、おまえさんはがさつな人間だから、どうしてわかることができようか。学人が云う、和尚さんははっきりとわかっておられますか。師が云う、わからない。学人が云う、和尚さんはどうしておわかりにならないのですか。師が云う、もしわかったら、密ではないようになつてしまつ。

・羅嵯羅密行 法華經授学無学人記品「羅嵯羅密行、唯我能知之」。注維摩經「羅嵯羅六年處母胎、所覆障故用三為名、明

聲聞法中密行第一」。

・若委則不密去 はじめの密と後の密とは落差がある。

問う、教中に言有り、方便門を聞いて眞實相を現す、と。如何なるか是れ方便門。師 拳を竖起す。如何なるか是れ眞實相を現す。師良久す。学云く、若し問を置かざれば、焉んぞ和尚の慈悲を委するを得ん。師曰く、也た須く進歩すべし。

問う、教中に言っています、方便門を開いて眞實相を現す、と。どういのが方便門ですか。師は拳をつきたてる。どういのが眞實相を現すですか。師は良久する。学人が云う、もし問わなかったら和尚さんの慈悲をどうしてわかることができまじょうか。師が云う、まだまだだ。

・法華經法師品 此經開方便門、示眞實相」。

大尉問う、如何なるか是れ摩尼珠。師云く、明日更に北禅に獻じ看ん。大尉云く、北禅に非ずして還た鑿る者ありや。師云く、臣僧幸ありて明君に遇うを得たり。

大尉が問う、どういのが摩尼珠ですか。師が云う、明日北禅に獻じまじょう。大尉が云う、北禅ではなくても、まだほかにそれと識る者があるでじょう。師が云う、わたし臣僧は幸にして明君に遇うことができました。

・北禅 不明。卷十、三 七十頁に同じ王大尉を北院と呼んでいることから、これも王大尉を指すと考えられる。

・臣僧有幸得遇明君 いやあなたのような明君でなくてはそれを識ることができません、という意味。

又学に示す偈を述べて曰く、瞎眼も善く解通す、聾耳も却って功を獲。一躰は無性に帰し、六處は本来同じ。我れ今齊しく拳唱し、方便も汝濃なんじに示す。佛祖の印を相傳し、老胡の宗を継続せん。

因みに雪峯、玄沙に問う、汝は還た國師の無縫塔を識りたるか。玄沙却つて問う、無縫塔は聞きこと多少なりや、高きこと多少なりや。雪峯顧視(原作示)す。玄沙云く、和尚何ぞみずから犯すを得たる。僧師に問う、玄沙は豈に是れ雪峯を諾せざるならずや。師云く、是なり。僧云く、す既にかくの如し。請う師、雪峯に代わつて玄沙に対えよ。師云く、向後、修造を用いず。

因みに雪峯が玄沙に問うた、おまえさんは慧忠國師の無縫塔を識っているか。玄沙は問いかえす、無縫塔はは聞きどれほど、高さはどれほどですか。雪峯はかえり見る。玄沙が云つ、和尚さん、よくもまあそんな大それたことができますね。僧が師に問う、玄沙は雪峯を肯わなかつたではありませんか。師が云つ、そつだ。僧が云つ、そつだとしたら和尚さん、どうか雪峯に代わつて玄沙に答えて下さい。師が云つ、以後、修造するにはおよばない。

- ・ 何自得犯 犯は無縫塔を犯すこと。広さや高さの枠をはめて無縫塔を犯すこと。
- ・ 向後不用修造 現存する無縫塔も無用だ、ということの間接的に示す。

佛日和尚、雲居に嗣ぐ。越州に在り。師、径山に到る。径山問う、伏して承らく、長老獨り一方に處る、と。何ぞ再び峯頂に遊ぶを得たるや。師云く、朗月空に當つて掛り、氷霜自ら寒からず。径山云く、是れ長老が家風なること莫きや。師云く、峭峙たり万重の山、此の中寶月を含む。径山曰く、此は猶お是れ文言なり、長老が家風作摩生。師云く、今日頼に佛日に遇えり。

佛日和尚は雲居に法を嗣ぎ、越州に住した。師はあるとき径山に行った。径山が問う、つけたまわるところによりますと、あなたは一方に孤高を保つておられるということでしたが、よくもまあこのお山にお出でのごことです。師が云つ、明るい月が空にあるので、自然と氷も霜も寒くない。径山が云つ、それがあなたの家風なのです。師が云つ、けわしくそびえた万重の山、その中に宝月がある。径山が云つ、それはなお言葉です。あなたの家風をすばりどう示されますか。師が云つ、さいわいあなたは今日この佛日に会つたではないか。

・獨處一方 臨濟録の所謂四料簡の條に、僧云、如何是人境兩俱奪。師云、并汾絶信、獨處一方」とある。

・朗月当空掛云々 そついつあなたの家風を慕つて参りました、とのこのこ出かけてきたことの理由を述べたもの。朗月は相手を譬える。

・峭峙万重山云々 これがわたしの家風である。師の答えは両方とも師の家風柔らかさときびしさ(を述べたもの。しかるに前者の示すところを径山は誤解した。それに対するたしなめである。

師別に一問を申ぶ、隱密全生、時人有るを知つて道い得 大省無辜、時人有るを知るも道い得ず。此の二途に於ける、猶お是れ時人昇降する處 未審いぶかし長老親しく道い、自ら道うに云何が道わん。径山云く、我が家の道う處は道う可き無し。師云く、如来路上に私曲無し。更に請う、玄旨もて和すること一場せよ。径山云く、任棄たとい一輪更互に照らすも、碧霄雲外に相い干せず。師云く、為に報ず白頭無限の衆 此中に年少にして郷に帰ること莫し。径山云く、老少同倫にして向背無し、我が家の玄路は参差すること莫し。師云く、一言もて已に天下を定む、四句誰が為に留むるや。径山云く、汝は道う三四有りと、我は道う其中一も亦た無しと。径山此れに因りて偈ありて曰く、東西すら相い顧みず、南北誰が与にか留めん。汝は則ち三四と言ひ、我は其中一も亦た無しと道う。師頌して曰く、遍く学びて窮切するも死屍を抱き、出身し得ざれば病治すこと難し。任汝海たといに入りて寶を献ずるも、自ら劍輪を治めて飛ばすに如かず。

・よく解らない一段である。

水西南臺和尚、雲居に嗣ぎ、潭州に在り。

問う、祖祖相傳す、未審いぶかし今の什摩をか傳う。師云く、閻梨が拳するに因らざれば、老僧も亦た知らざりしならん。

問う、祖祖の相伝は何を伝えたのですか。師が云う、お前さんにとり出して貰わなかったら、わしも気づかないところだった。

中曹山和尚、曹山に嗣ぎ、撫州に在り。師慧解と号す。姓は黄。泉州非田縣の人なり。漕源の法席に造り、密に玄道に契いてより、更に他往無くして荷玉に居す。

僧問う、璞を抱きて師に投ずる時如何ん。師云く、是れ自家の珍ならず。僧曰く、如何なるか是れ自家の珍。師云く、琢せざれば器を成さず。

あらたまを抱いて師のもとに身を寄せたらどうされますか。師が云う、それは自分のためではない。僧が云う、なにが自分のためですか。師が云う、琢磨しなければ使いものにはならない。

・抱璞は卞和の故事。

・家珍 会元七雪峯の伝に「従門入者不是家珍」とある。

・この段は、伝灯録では巻二十荷玉のところに入っている。

問う、佛未だ出世せざる時如何ん。師云く、曹山如かず。曰く、佛出世せし後如何ん。師云く、曹山に如かず。

問う、四山相逼る時如何ん。師云く、曹山裏許に在り。僧云く、還た出離を求むるや。師云く、若し裏許に在らば出離を求む。

・四山 別訳雜阿含四二 三九九a)に「譬如四方有大山、廣大深厚無涯際、從四面來一時至、讓惶奔走無避處、象車馬兵不能拒、呪術財寶不能却、如是大王無常山、老病死山衰滅山、殘滅一切有生類」。

・裏許は「なか」。

金峯和尚、曹山に嗣ぎ、杭州に在り。師、諱は從志、福州古田縣の人なり。恥越を離れ、便ち漕源に造り、頓に玄暉に契いてより、更に他往せず。初め金峯山に住し、後、報恩寺に住す。師、玄明禪師と號す。

問う、四海晏清なる時如何ん。師云く、猶お是れ蝗下の漢。僧曰く、王は還た知れるや。師云く、王は神を少^かかず。

問う、天下泰平のときどうですか。師が云う、なお階下の漢だ。僧が云う、王はご存知なのですか。師が云う、王はほけてはおらん、(それを問題にするお前自体が問題だ)。

・四海晏清というのは聖天子の下で人民がそれぞれに所を得ている状態。そこからはみ出して、その分にあずかれない者、それが蝗下の漢である。お前は蝗下の漢だと云って師は相手の僧をきめつけているのである。蝗下漢という語は伝灯録八、南泉の伝にも見える。陸異曰又謂師曰、弟子亦薄會佛法、師便問、大夫十二時中作摩生。陸云、寸絲不掛。師云、猶是蝗下漢」。

・王不^レ少神といふのは、わしはほけてはいないぞという意味合いを持つ。

問う、如何なるか是れ禪。師云く、動轉せず。如何なるか是れ道。師云く、万物に同じからず。進んで曰く、禪と道と相い去ること近きや遠きや。師云く、近きことは則ち近く、遠きことは則ち遠し。如何なるか是れ近きことは則ち近き。師云く、対面するも并じ得ず。如何なるか是れ遠きことは則ち遠き。師云く、兜率を過ぐ。

問う、禪とは何ですか。師が云う、動かない。僧が云う、道とは何ですか。師が云う、万物と同じでない。進んで云う、禪と道との距離は近いのですか、遠いのですか。師が云う、近いといえれば近いし、遠いといえれば遠い。僧が云う、近いといえれば近いとはどういふことですか。師が云う、面と向かってもそれだと見てとれない。僧が云う、遠いといえれば遠いとはどういふことですか。師が云う、兜率天よりも上にある。

・後半の師の答えは、禪と道との距離というわくから出て、質問者と禪道との距離、僧と師その距離を云うものであろう。

問う、古人は則ち調絃して、弁するを以て希と為す。只だ熊耳と曹溪との如きは、何を以て驗と為すや。師云く、紋綵無し。進んで曰く、既す然でに此くの如ければ、六葉何れ従りか来たる。師云く、豈に是れ紋綵有りや、那作摩。僧云く、古人還た傳つるや。師云く、若し傳えざれば争でか今日に到るを得ん。僧曰く、既に紋綵無し、作摩生か傳えん。師云く、傳つることは是れ紋綵無きなり。僧曰く、和尚還た傳つるや。師云く、作摩傳えざらん。僧云く、古人の意如何ん。師云く、曹溪門前の力掌、直に如今に至るまで忘ぜず。僧曰く、向後の事如何ん。師云く、千囑万囑。

・ 古人則調絃云々 伯牙と鍾子期の故事。

・ 熊耳は達磨、曹溪は六祖慧能。

・ 以可為驗 六祖が達磨の禪を伝えた際、これこそ達磨禪の驗しるしだとして六祖が見て取つたものがあるはずだ、またそれがなければ伝えるということもできないはずだ、といつ前提が質問者にはあるようである。

・ 紋綵 驗しるしとすべきキャラクターリストイクス。金剛經における、相さうの字に当たるであろう。薬山の伝に、師有一日看經次、白顔問、和尚休得看經、不用攤人得也。師卷却經、問白顔、日勢何似。対曰、日正當午時。師曰、猶有紋綵云々」とある。また鏡清の伝に見新到參次、拈起拂子。対云、久嚮鏡清、到来猶有紋綵在云々」とあるのを参照。

・ 六葉は六祖を指す。紋綵がなければ伝えようがないでしょうという語気がこの質問の裏にはある。

・ 豈是有紋綵那作摩 紋綵があるとも思っているのか、どうだ。那作摩は詰問の語気。

・ 伝は無紋綵 伝えるということが紋綵がないということなのだ。

・ 力掌 意味不明。

・ 千囑万囑 ものを頼み込む時のきまり文句。あとのことはくれぐれもよろしくたのむ。

鹿門和尚、曹山に嗣ぎ、襄州に在り、師、諱は眞禪。

問つ、如何なるか是れ得道底の人。師云く、口の鼻孔に似たる有り。僧曰く、忽し客有つて来たらば、何を將つてか祇对せん。師云く、柴戸草門、棄の経過するを謝す。

・ 有口似鼻孔 無舌、無口。

・ 謝 感謝と謝絶との両意にとれる。

祖堂集卷第十一